

日蓮主義 戰士の伴侶 一部金壹圓八拾錢

民心變動の兆頗る急を告げ日蓮主義の戰士に對し進軍を促すこと切なりこの要求に應じ戰士の伴侶として教義の秘奥を開示せるもの實はに本書なり書中論明する所は、思想問題と日蓮主義、宗教信仰の要義、法華經の五大教義、本尊の要義と其歸結、信行の要義と其歸結、得益の要義と其歸結、佛教人身觀の概要、佛教倫理觀の概要の八大編にして記述極めて懇切なり知法思國の戰士速に一本を軍營に備へて諂略を諤ること莫れ。

本多日生師著書一覽

- 法華經の心髓 壹圓參拾錢
  - 日蓮主義の運用 金壹圓八拾錢
  - 聖訓要義 卷一、二、三、四、五既刊 卷六壹圓金壹圓七拾錢
  - 開目鈔詳解 上卷一部 金貳圓
  - 聖語錄 金貳圓貳拾錢
  - 日蓮主義の初歩 金七拾錢
  - 東洋文明の權威 金壹圓八拾錢
  - 日蓮主義の權威 金壹圓貳拾錢
  - 修養と日蓮主義 金壹圓貳拾錢
  - 日蓮聖人の正傳 金壹圓八拾錢
  - 日蓮聖人の感激 金壹圓八拾錢
  - 日蓮主義の綱要 金壹圓貳拾錢
  - 國民道徳と日蓮主義 金壹圓貳拾錢
  - 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
  - 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
  - 國民教化 金壹圓八拾錢
  - 法華經通解 金壹圓八拾錢
  - 戰士の伴侶 金壹圓八拾錢 各送料八錢
  - 大藏經要義 送料一部十八錢半前金送料不要
- 購讀希望の方は左記へ申込さるべし  
 東京市外品川妙國寺内  
 大藏經要義刊行會  
 振替東京三一五九八番

目次

思想の惡化善化(時言).....本多日生

一、緒言.....二、思想戰の意義.....三、我欲よりは道徳へ.....四、職務よりは宗教へ.....五、反目よりは共同へ.....六、個人よりは國家へ.....七、要求よりは人格へ.....八、不平よりは自度へ.....九、不安よりは安住へ.....十、運動よりは警戒へ

佛教信仰の正統.....本多日生

我等の準備.....佐藤鐵太郎

日本國の使命.....野澤梯吾

永遠の妙教.....本多日生

當體蓮華に關する聖訓.....本多日生

日蓮聖人教義綱要.....井村日成

記事、報道十數件

第廿四年五月號



譬へば王使の善能く談論し方便に巧みなるが、命を他國に奉ずれば寧ろ身命を喪ふとも終に王の所説の言教を匿さざるが如し、智者も亦爾なり、凡夫の中に於て身命を惜まず、要必ず大乗方等如來秘藏を宣説せん、一切衆生皆佛性有り」と。

(涅槃經菩薩品、正大藏第八套の七)

菩薩摩訶薩は惡象等に於ては心怖懼無し、惡智識に於ては畏懼の心を生ず、何を以ての故に、惡象等は唯だ身を壞るも心を壞ること能はず、惡智識は二俱に壞るが故なり、是の惡象等は唯だ一身を壞るも、惡智識は無量の善心を壞る、是の故に菩薩は常に常に諸の惡智識を遠離すべし。

(涅槃經菩薩品、正大藏第八套の八)



# 思想の惡化善化

(大正九年四月二日自慶會名古屋支部  
創立大會の節同地國技館に於て)

本多日生

## 目次

- 一、緒言
- 二、思想戰の意義
- 三、我意よりは道徳へ
- 四、墮落よりは宗教へ
- 五、反目よりは共同へ
- 六、個人よりは國家へ

- 七、要求よりは人格へ
- 八、不平よりは自慶へ
- 九、不安よりは安住へ
- 十、煽動よりは警戒へ

以上

## 一、緒言

思想問題の一段大切なる秋に方りまして、斯の如き多數來會者の前に思想に關するお話を致しまするは、私に取つて非常に光榮且つ愉快に感ずる次第であります。私の講題は「思想の感化善化」と題して置きましたが、その緒言として少しく申述べたいことがあります。

元來人類の社會に於ては、凡ての問題を超越して、何時の時代でも如何なる國でも、思想のことが文化の根本であらうと存じます。嘗に今日露西亞が思想の爲めに土崩瓦解した、獨逸が思想のために戰の終に於て惨めなる敗北をした、支那が思想のために國力が弱つて居るといふ、此の現状に於て思想の大切なることを學び得らるゝのみならず、凡そ人類の歴史はその初めより今日に至るまで、總ての場合に於て、若しも人類が思想を説つたならば、その結果は頽廢に歸すると云ふことを語らざる頁は一頁も無いのであります。(拍手喝采)それ故に政治家といはず、宗敎家といはず、苟も活眼達識の士は、何れの時代に於ても思想のことを最も重き事に考へて居るのである。(拍手)思想を忘れて經濟を論じ、思想を忘れて法制を論じ、思想を忘れて軍備を語るが如きは、少なくとも第二位以下に屬する平凡なる人達である。(拍手喝采)然らば我が國民は左程に大切なる思想問題に就て、如何なる決心、如何なる態度を執りつゝあるか、國家の興廢は國民思想の如何に依つて成れることは頗る明白であり、國家が頽廢する場合に何處に國民の幸福があるか、(拍手喝采)國民全般の幸福を衰へる時、勞働者のみ獨り幸福を享けると云ふ理はあるまい。(拍手喝采)然らば左程に大切なる思想の事柄に關して、今の日本人は、思想が感化しつゝあるか、善化しつゝあるかと云ふ事に就て、徐ろに之を觀察したならば、何人も非常な憤慨の心を起さざるを得ないであらう。(拍手喝采)貨銀の少なきに怒る事のみを知つて、國民全般の思想が頽廢することを憂へざる者は、平凡なる人達である。(拍手)己れの目前の利害のみを考へて國家の興廢を忘るゝが故に、思想の大事に眼が着かぬのであらう

諸君、我が釋迦牟尼佛は、人々が惡しき思想に陥るは毒を服むが如きものであると云ふことを屢々説いて居る。毒藥を服み、毒を食へば必ず我が身が死すると云ふに、好んで之を食ふ者は白痴でありませう。(拍手)思想も亦同じことで、それは毒になると云ふことが明かであるのに、之を受け容れんとする者があつたならば、之を感かざる人と謂はなければならぬ。(拍手)況してやその毒を宣傳する、その毒を撒いて歩くと云ふ者があつたならば、是は惡人と謂はなければならぬ。(拍手)それ故に我が釋迦牟尼は、惡知識は毒蛇虎狼よりも恐るべしと云ふ事を、涅槃の場合に遺訓せられた。毒蛇虎狼は肉體を喰ふけれども、精神までも喰ひ盡すものではない、惡知識——即ち謬れる思想を宣傳する者は、世の人の心を喰ひ破るものである、心を喰ひ破らるれば、肉體の幸福も喰ひ破られてしまふものであつて、心も身も共に粉碎し終る所の者が惡知識である。(拍手)諸君、何も騒ぐことはありません、何もが毒であるかと云ふことを説明もしない時に方つて、お騒ぎになるのは、自から毒を振り撒きつゝあると云ふことを承認せらるるのでありますか。「ヒヤーン」(拍手喝采)それ故に思想の事に就ては心を落つけて考へなければならぬのであります。又釋迦牟尼佛は、善知識は全覺行なりと云ふことを説きましたが、何も高い所に登つて喋べる者がえらい譯ではない、是は或る定まれる眞理、或る定まれる教、或る定まれる軌範を傳へるだけの通辯に過ぎぬものであります。それ故に私が話して居るからと云つて、是は私の意見とは云ふものの、定まれる或る一つの法則に就てお話をするに過ぎぬのである。(拍手)例へば「惡知識は毒蛇虎狼よりも恐るべし」と言つたからと云つて、これは大聖釋尊の金言であつて、決して之に反對すべき理由は無いのであります。(拍手喝采)

## 二、思想戰の意義

そこでこの思想の事が大切であると云ふことが分つた以上は、更に考へねばならぬことがある、それは即ち思想戰の意義

であります。

戦の起らぬ平時の場合ならば、國民の考が多少はばんやりして居つても思はずべき點もあるが、國家が一旦緩急ある場合、國家の興廢存亡が目前に迫りつゝある場合に於て、うつかりして居ると云ふ事は許されぬことである。それと同じことで、今の日本の思想界は平和な時代ではなくして、既に思想の戦闘が開かれて居るのである。その思想の戦に於ける意義、我國は思想の戦に於て如何なる立場に在る者であるかと云ふことを、國民は深く考へなければならぬと思ふ。今日は唯だ個人の思想の自由を叫び、個人の學問の獨立を叫んで居るやうな、平時の場合とは違ふのであります。(拍手) 今日國民の思想の趣、所如何に依つては、前に申す通り國家の消長が攸れ、隨つて國民の幸福と否とが攸れ、又我が大日本帝國が世界に盡すべき使命を果し得るや否やと云ふことも、今日の國民思想の趣、所如何に依つて攸れるのであります。(拍手喝采) 左様な大切な場合に、唯だ一個人の思想の自由であるとか、學問の獨立であるとか云ふ位な事を言つて居つては、間そくに合はぬと考へます。(拍手) 今は國民の思想の善化するか、悪化するかと云ふ分水嶺に立つて居るのが我國である。(拍手喝采) それ故に小さな問題は暫くお預りにして、大體に於て國民の應ふべき健全なる思想を涵養する必要があるものであります。

そこでその思想の戦の奥に控へて居る恐るべきものを知らなければならぬ。戦が開かれた時分には敵情を詳かにしなければならぬ、敵の事情を偵察せず、敵の本營を知らず、敵の叢叢を知らなかつたならば、必ずや戦闘は敗北に歸するものであります、それは別段孫子の兵法を學ばなくとも、誰でも心得て居ることである。然らば今日日本に於ける思想の戦は、敵の本營は何れに在るか、敵の戦術は如何なるものであるかと云ふ事に就て、一つ考へて置かなければならぬ、唯だ表面上に現はれて居る勞働問題であるとか、選挙問題であるとか、物價調節問題であるとか、外交問題であるとか云ふ今日日本に於て一番重い問題とせられて居る事柄は、是はその表面より觀察するが故に起ることであり、世界に動いて居る思想に就て、又日本の思想戦に就て、その根柢に眼を着けた時には、我が國體が動搖するや否やと云ふ問題に迫つて居ります、我が

國民が三千年間養ひ來つたる大和魂をも今日は腐蝕しはせぬかと云ふ問題に迫つて居る。これを變うて來る思想のその奥には、最も險惡なる所の或は共產の思想であるとか、或はアナキズムの思想であるとか、ボルシェヴィズムの思想であるとか、或は猶太のマツソンの秘密結社の陰謀であるとか、世界の人類の敵である所の恐るべき思想が日本を目標にしてドンドン迫つて來て居るのである。今日日本の國民が注意しなければならぬのは、自分の思想言論が是等の恐るべき思想を、間接にも授けるやうな事があつてはならぬ點である。(拍手) 平時の場合であるならば焉知らんが、今日は國民の最も謹慎して、最も眞面目に思想の問題を考へねばならぬ秋であります。

その恐るべき思想に就ては、諸君も御承知のことであらうが、唯だ一二簡單に申さんければならぬ。近來問題になつて居るクロボトキンの學說と云ふものは、私或る事情に依つて前年大逆事件の當時より、クロボトキンの思想と云ふものに就てはその大要を心得て居る積りであり、是は御承知の通りに露西亞の盧無黨と云ふものゝ系統を受けて居る、露西亞の盧無黨の開山であるバクニンと云ふ者の道統を繼いで更にその學說を大成した人である、さうして彼は亞米利加に連れて居つて、幸徳傳次郎は亞米利加に行つて、このクロボトキンより極端な直接行動を學んで歸つた者である。そのクロボトキンの學說は色々言つて居るけれども、彼の志す所は、現在の國家組織を打ち壊すと云ふことが第一の目的である、今日の如き國民對國民の區域を撤廢して、國と云ふものを壊してしまはう。又今日のやうに是は誰の土地だ、是は誰の財産だ、誰の家だ、誰の着物だと云ふ、この所有權を廢止してしまはうと云ふやうな、所謂無政府共產の思想を有らゆる方面から力説して居るものが、クロボトキンの思想であります。その思想が或る事情に依つて既に前年大逆事件となつて日本に現はれた、この國民の間に既に傳染して來て居るのである。又近來傳染されて居るマルクスと云ふ經濟學の大家がある、無論大學者であるが、併し彼の學生の主張として書いた所の『共產主義の宣言』と云ふものは、御承知の通り非常に極端なものであつた。やはり第一には所有權を廢止せよと云ふのであります。所有權廢止と云ふ事も、何にも無い者から考へたらうまいやうに思ふだら

うけれども、それでも諸君は着物を着て居る、羽織も着て居る、モウ一つ貧乏な襟袢一枚の奴がやつて来て「君は着物の上に袴纏を着て居るナ、その袴纏を俺に寄越せ」……、モウ一つ素寒貧な禪一つの奴が来て、「君は襟袢を着た上に着物を着て居るナ、上の着物を一枚俺に寄越せ」……、その甚しきに至つては、今食つて居る所のパンの一片に於ても、飢えたる者が来てその半ばを寄越せと言へば之を與ふべきものなりと云ふことになる。それであるから所有權を廢止すると云ふことになつたならば、自身の身に着けて居る時計であらうが、着物であらうが、之を拒むことは出来ないものである。それから更に彼は階級の戦闘を宣言し、資本階級と労働階級とを仇敵のやうに言つて、俱に天を敵くことの出来ないもので、何處までも徹底的に戦つて資本家を撲滅せよと云ふことを主張するのである。決して折合ひなどを附けるものではない、飽きでも資本家を喰うて、そのどてつ腹を抉らんければ止まぬと云ふやうな猛烈なる勢を以て、階級戦闘を宣言して居るものであります。更に彼は家族制度の撤廢を主張するので、親子兄弟夫婦といふやうな者が相寄りて家庭を造つて居ることを止めてしまへと言ふ、それ故に親子の間に在る所の孝行の道徳、兄弟の間に在る所の友愛の道徳といふやうなものを悉く廢るることになつて居ります。更に彼は女子の共有を主張して居るのである、女は男が共有すべきものである、それ故に出来た子供は誰の子か分らぬから、子供は養育院のやうなものを拵へて、誰の子ナンと云ふことは決めないで、一號二號三號といふやうに符牒を附けて打ち込めと云ふやうな事になる譯である。女子共有と云ふことも、獨身で暮して居る者が、どの美人でも自分のものだと言はれれば、大變良いやうに思ふけれども、左様な秩序を破壊したる場合に於ては、決して良いことはないので、互にその間にどづき合が始まるだけのものである。犬がつかつる、み居るのを見たなら分る、彼等犬の社會に於ては牝犬は即ち牝犬の共有である、併ながら一頭の牝犬に五頭も六頭もの牝犬が追かけて居る場合の彼の交尾の状態といふものは、決して安全なるものではない。斯様なものであるから、女子を共有するなど云ふことは決して出来得べき事ではない、又左様に女を男子の奴隷の如く考へると云ふことは、人格尊重の思想から見ても甚だ矛盾したる事である。(拍手)更に後は唯物史觀と云ふことを主張して、人類の文明は精神的の文明が廢れて、高き道徳であるとか宗教であるとか云ふやうなものは三文の眞値も無くなつて、唯だパンの問題——食ふ事飲む事に進んで行くものであると言つて、彼は高き道徳を罵り、宗教を否定して掛かる所のものである。更に彼は國民對國民の區域を撤廢せよと云つて、今の國家の組織を破壊して、國民などと言はずに、労働階級、資本階級と言ふものが對立して、世界に國際的労働團體を造つて、貧乏人は貧乏人の仲間、金持は少數だから階級を倒してしまへと云ふやうな事を唱へて居る、恐るべきものである。更に總ての特權階級を廢止せよと云ふので、例へば軍隊には將校と兵卒と云ふ階級があるからいかに、將校も兵卒も同じにせよ、學校でも校長と云ふ者と教員と云ふ者が給料が違つたり、資格が違つたりしてはいかぬと云ふことになるから、總てその間の規律、命令と云ふものを全部否定する所の思想であります、その通りの思想が露西亞などに段々實行されて來たのである。又一方にマツソンの秘密結社なるものは、殆ど公けなる事實であるが、猶太教の亡魂とも言ふべきものが、金の力に依つて世の中を支配しやうとして、今までのやうに或は軍隊の力に依つて支配するとか、國家の組織に依つてやると云ふのはいけないと云ふ事を考へて、労働運動を通じて國家の組織を破壊し、軍隊を全廢して、最後金のみが尊い、金貨のチャラ／＼と云ふ力で總ての者を征服しやうとする所の陰謀があつて、大分それにやられて居るのである、露西亞の今日のボルシヴィズムの如きは、殆どその猶太教の秘密計畫の成功であると言はれて居る、中々恐るべきものである、詳しい事は進も簡單な時間にお話が出来ないが、何と言つても恐るべきものである。「そんなものは恐ろしくない」とか「左様なものを恐れるのは不健全なる國民だ」とか言つて豪傑を氣取つて居る人もあるけれども、コレラが流行つて來ても、ベストが流行つて來ても「ナニニ、コレラが何だ、ベストが何だ、ベスト高位食つてやれ」……(笑)ナンと言つて威張るのは、豪傑に似て實は非常識の者であります。(拍手喝采)恐るべきものを恐れるのは賢明なる者であらう、虎が追かけて來やうが、毒蛇が追かけて來やうが「ナニ虎や毒蛇が何ぢや」と言つて毒蛇に呑まれたり、虎に噛みつかれたりして、それでも未だ「ナニ捨げるものか」と言つて居るのは、……(笑)それは決して豪傑で

はない、暴虎馮河と云つて昔から相場が定つて居ることである。(拍手喝采)故に今日のやうに世界の悪思想が我國を襲ひ來つた時には、國民は舉國一致を以て、此の悪思想を擊退するが爲めに——武力の戦ひは敵國が現はれて日本を破られんとする時、國民が愛國の誠忠に活きるが如くに、思想の戦ひに於ても愛國の赤誠を振り起してこの悪思想を擊滅するのが、我が國民の本分であらう。(拍手喝采)小さな理窟に囚はれたり、自分が一旦言ひ掛けたと云ふ我見の爲めに、間違つたとは知りながら今更後へ引いては體裁が悪いと云ふやうな小我に囚はれて、一國の大事を誤ることがあつてはならぬ。(拍手喝采)

そこで色々お話ししたい事もあるけれども段々時間が経つて行くから極く簡單に申上げるのである。

### 三、我慾よりは道德へ

その次に申上げる事は、左様に思想の戦ひには恐るべきものがあると云ふことを一つ考へると、今日國民の注意すべき事は、我慾よりは道德へと云ふことであると思ふ。

人間の欲望、それが直ちに悪いとは言はぬ、それは美味しい物も食ふが宜い、美しい着物も着るが宜しい、決して吾々は無我を主張し、無慾を主張する程に古い宗教を振り舞す者ではない、無論人間の欲望は或る程度に於て之を認めるけれども、我慾のみを尊い事と思つて、その爲めに道德をも蹴散らし、宗教をも蹴散らし、國家をも蹴散らし、親父の頭をも踏み破つても我慾の一點張りで行かうと云ふやうな事はいかぬ。(笑拍手)大體我慾と云ふ奴が分限を超えたがものと云ふことを知らなければならぬ。(笑)私は經濟學者の大部分が、人間の欲望が經濟發展の基礎だと云ふ風に考へたのが間違ひではあるまいかと思つて居る。人間の欲望から出發して商工業の發達を圖ると云ふことでは、結局今日のやうな争ひに陥らざるを得ない、商工業の發達はもう少し高い理想に於て之を刺戟鞭撻することにならなければならぬと思ふ。(拍手)そこで我慾もまる、つまり悪いとは言はぬが、兎に角少し節制をして、之を抑制し、制限することが今日は必要であると私は認めます。

そうするとその我慾の方に使う心が明いて來ますから、その明いた方の心を道德修養の觀念に持つて行かなければ、資本家を如何に攻撃しても、資本家が我慾の精神に捉はれて居る以上は、到底思ふやうな解決は出來ない、勞働者を如何に責め立てても、勞働者の頭腦が我慾一點張である以上は、如何なる經濟上の解決法案も、法律上の解決法案も結局失敗に終るものである。どうしても世の中を善くするには、資本家の頭腦も我慾を制して道德を補充し、勞働者の頭腦も我慾を制限して道德を補充しなければならぬ。(拍手)

### 四、墮落よりは宗教へ

もう一つその次に申上げることは、墮落よりは宗教へと云ふことでもあります、今日は随分人心が墮落して來て居る。是も私は一概に唯だ石部金吉のやうに、苦言を嚼み演じたやうな顔をして暮せとは言はぬ、笑つて暮すも宜い、談ねて暮すも宜い、唯だ墮落と云ふのは溝の中には、まるごとであるから、睡る位は宜いけれども、調子を外して溝の中にはまり込んではいかぬ。(笑)顔の上に蛙がピョン／＼飛んで居つても知らずに寝て居る(笑)と云ふ様な事になつてはいけませんと言ふのである。

所が今日の文明は色々辯護する人もあり、誇りとする者もあるけれども、東西を通じて人心の墮落は著しいものであります。吾々が奉ずる宗教、吾々が奉ずる道德、宗教から觀て、この人間の心に有つて居る低い方の欲望が餘りに發達をし過ぎて、唯だ飲む事や、食ふ事や、つるむ事や、さう云ふ事はかりに心が行つて居るしなないか、(笑)無論それを絶滅すると云ふことは出來ぬけれども、胃袋の奴隷となり、翠丸の奴隷となるといふことはいかぬ、(笑喝采)此處を一つ喰止めなければならぬ是が實は大きな問題で、話は續かないやうであるけれども、是が事實人心を支配して居る力である。胃袋の爲めに支配せられ、翠丸の爲めに支配せられる事が多いので、今日はこれが一番優勢ぢや。(笑、喝采)そこで之を或る程度に制限をしなければならぬ、それは胃袋を締め上げて斷食をせよとは言はぬ、翠丸を取つて去勢せよとは言はぬけれども、これを或る程度に制限

する力を養つて、人間の心の力に依つて、心が命令して胃袋の嚥を抑へ、胃袋を引締めると云ふやうにしなければならぬ。(拍手喝采)そこが大切な事だがそれは一通りの理窟では成程と思つても、それが唯だ考へたきりで、中々胃袋の旺盛なる力に對抗が出来ない。(笑)それ故に是はどうしても宗教の信仰に入つて——、宗教の信仰と云つても、何も坊主を信する譯でも、お寺を信する譯でもない、この宇宙に絶対の神あり、佛あり、道ありと云ふ偉大なるものを一つ信じて、真心を以てこれに向ふ、朝顔を洗つた時にも之を禮拜し、用事が終つた時にもこれを禮拜し、行道く時にも心に之を念すると云ふ風にすると、胃袋の奴隷となり、胃袋の奴隷となる、この淺ましき生活より脱することが出来るのである。(拍手)そこで今日は宗教の復活運動が、最も大切なのであります。

## 五、反目よりは共同へ

その次に考へねばならぬ事は反目よりは共同で、今は即ち労働運動などが戦をするのが當り前のやうに考へて、労働問題に於ける労働協調とか、温情主義と云ふものを一概に罵倒する人があるが、是は想はざるの甚しきものである。如何なる場合に於ても、人間が優しい考を以て物を解決しやうとする、それを否定する道理はない、國際の間に於ても人道正義に依つて、平和なる解決をしやうと云ふ事の成立つた今日、同一國民の間に於ける僅かなる利害の違ひを、隠かなる精神を以て正當なる解決の方法がないと云ふ理窟は決してあるまい。(拍手喝采)それ故に如何なる問題でも——政治上の問題でも、唯だ一概に之を政黨の軋膝ばかり高くして「己れが——」と云ふやうな態度で行くと云ふ事は、政治の本義ではあるまいと考へる、(拍手)労働問題と雖も資本家と労働者が敵のやうに言うて、「己れ——」と云つて石をぶつけ合ふと云ふやうなことは、健全なる運動でない、私は斷言します。(拍手喝采)

是は商工業の發達と云ふことを考へても、兩方がどうしても安協しなければならぬ。露西亞のやうに資本家を打つ倒して行つたならば、會社が皆潰れてしまふぢやないか、今日はレーニンの政府でも舊の資本家を尋ねて「どうか再び會社を經營して呉れ、さうしなければ多數の労働者が職が無くて困るから」と言つて、頼んで廻つて居るやうぢや、けれども資本家は前に懲りて居るから、容易に手を出さない。それをクロボトキンなどは、「頼んで廻るのは腰が弱い、労働者が干乾しにならうがどんな事にならうが、元の資本家などに頭を下げるなんて手ぬるい事はいかぬ、首を吊らうが、餓死しやうが、元の資本家に頭ナンカ下げるナツ」(笑)と云ふやうな事を言つて居る、元から左様な事を主張して居る「必ずや一旦破壊した後には多數の者が困つて、元の資本家に頭を下げるやうな事が起るけれども、それが大禁物ぢや、モウ一つやれツ、……首を吊る物が出来ても干ばしになつても、そこを辛抱してモウ一息やれツ」(笑)……斯う云ふ事を彼は書いて居る。それを一生懸命でやらうと思つてバタ／＼やつて居ると、結局皆なが斃れてしまつてあとは野原となつてしまふ、その時を以て満足の笑をニタリと洩さんとして居る所の恐しき惡魔がある。破壊と混沌の内に生活せよと云ふのであるから、之を名けて虛無黨と云ふのである、何もかも無くなつて無一物になつて、燒野原の灰の中からヒョロ／＼と草が生えたる時、獨り恐るべき惡魔がニタリと笑はうとするものである、之を虛無黨と云ふのである。

斯の如く今日は國家の大事の場合であるから、どうか政治上に於ても餘り極端なる軌條は相互に避けるやうに、國家の爲めにお願をしたい。經濟上の事に就ても資本労働の間のこととは適當なる方法を以て、どうぞ共同一致の精神に戻つて敵をたといと考へるのであります。(拍手)

## 六、個人よりは國家へ

いま一つは個人よりは國家へと云ふことで、無論個人の幸福を忘れ、個人の自由を壓迫するやうな國家は認められぬ事であるけれども、個人の幸福を保全し、個人の自由を得せしむると云ふことは、今日の文明に於ては、その國家が相當なる力

を有つて居らんければ、國權が衰へてしまひ、國威が地に墜ちてしまつた時、何ぞその國民の幸福、自由があらうぞ。(拍手喝采) これを露西亞に見たら分かる、露西亞は一概に個人の自由を極端に叫んだが爲めに、國を忘れてしまつて、個人の自由、個人の幸福と云ふので勞農政府が成立つた時、露西亞國民全體の幸福は無くなつてしまつたぢやないか。彼は自由を求めて虐殺を得たり、彼は幸福を求めて飢餓を得たりと言つて居るが、實に憫れなものであります。

それ故に個人の幸福と云ふことは無論捨てられぬけれども、個人の幸福から考へても、又國家全體の目的から考へても、國體の尊嚴より考へても、我等の先人が血と涙を以て擁護したる所のこの歴史の上から考へても、東洋文明の大切な意義から考へても、唯だ個人の生活上の利害のみに心を奪はれると云ふことは面白くないと思ひます。(拍手) どうしても是は國家全體の文明を進めて、國家の中に——國家的社會政策の中に多數の幸福を保全せなければならぬ。單なる勞働運動、單なる社會政策と云ふものはいかぬ、國家の發達の中に於て適當に勞働運動を解決し、國家の發達の中に社會政策を實行すると云ふことを忘れては相成らぬと考へます。(拍手喝采)

### 七、要求よりは人格へ

いま一つは要求よりは人格へと云ふことであります。無權利の主張を全部否定はしない、要求と云ふ事が悪いとは言はぬけれども、最早や要求する事は相當に覺えたのであるから、尋常一年の課程を終つたら尋常二年の課程に移るが宜しい、要求のみを始めから終ひまでやつて居ると云ふのは餘りに幼稚である。要求と云ふことを覺えたならば、その次に學ぶべきものは自分の人格であります。今日日本の勞働者に缺けて居るものは、勞働者の人格問題である、例へば勞働者が電車に乗つて肘を突つ張ると云ふやうなことを、澤山目撃するのであります。(勞働者はかりにあらざ) 無論人格と云ふものは總ての人が相互的でありますが、人格を尊敬せよと云ふ事のみを互に要求した時には、誰が一體尊敬するか、尊敬する者は無くなるではありませぬか、私の言ふのは相互的であります。勞働者の人格を尊重せよと云ふに就ては、勞働者自からその人格を磨き、且つ又他に對して相當の敬意を拂はなければならぬ譯である。(拍手) 是は確に今日の勞働者が穿き違へて居られはせぬかと私は考へて居る。又私は勞働者のみに就て言ふのではありませぬ、日本人が色々の要求をする事を教はつたならば、今度は自ら退いて人格の修養をせなければならぬと思ひます。

### 八、不平よりは自慶へ

その次には不平よりは自慶へと云ふことで、今日は餘りに不平を言ふ者が多い。これを役人に就て聞けば役人も不平を言うて居る、軍人に聞けば軍人も不平を言うて居る、勞働者に聞けば勞働者も不平を言うて居る、教員は教員で不平を言うて居る、坊主の不平は餘り聞かんけれども、能く尋ねたら是もやつぱり不平を言うて居るだらう。(笑) さうすると國民が皆な不平で、親父も不平、女房も不平、爺さんも不平、婆さんも不平、下女も不平、書生も不平……誰も彼も不平ばかりを云ふことになつてしまつた時には、到底健全なる文明は實現出来ない。それ故に不平を言ふ事はこれ亦相當覺えたのだから、不平の方をモウ是から以上發達せしむる必要はない、不平よりは進んで自慶へ——自ら慶ぶ精神の力を養はなければならぬ。不平を言ふ人は相當な地位を得ても、相當な利益を得ても言ふものであります、それは同じ酒を飲んでも、泣き上戸と怒り上戸と笑ひ上戸と云ふものが極まつて居るやうなもので、貧乏だから怒りつばいと云ふのぢやない、金持になつて怒る、役人でも下ツ端だから怒るのぢやない、課長になつても局長になつても、怒り上戸の先生は「バイやれば直ぐ「コラッ」……(笑)と云ふやうな事を言ひ出すものぢや。そこで國民一般が不平上戸になつてはいかぬから、先づ笑ひ上戸の方に——自ら慶ぶ方に國民の精神を導かんければならぬ。慶びの内に力がある、人間は希望に生き慶びに生きぬ限りに於ては、到底慶な仕事は出来はしない、我が國民は國の御めより「面白い」と云ふ言葉をもつて居る國民である、「面白い」といふことは何であるか



といへば、誰の顔を見ても慶びに満ちて居ると云ふことで、顔の色が白いと云ふことぢやない、誰の顔を見ても「お早うございませう」と言へばニコリと笑つて居ると云ふのが、日本人の特色である。それが此の頃では電車に乗つても不平面をしてブツ／＼言つて居る、(笑)新様な事は吾々祖先が教へたる大和民族の本性ではないのであるから、その同一國民が「己れが／＼」と云つて睨み合ふやうなこの不平の料簡を鎮めて、自から慶ぶだけの精神力を養ふ事が大切であると考へます。(拍手喝采)

### 九、不安よりは安住へ

いま一つは不安よりは安住へで、生活が不安であるとか、社会状態が不安であるとか言つて、唯だ不安だ／＼と云つて小言を言ふよりも、これを安全なる状態に造り上げるといふ自覚をお互が有つてやらなければなるまい。安全にするには、より多く努力して、今日よりは物を少なく使ふやうにさへすれば、そこに安全は現はれて来る。より怠けて、より多く贅澤をして、而も安全を得やうとするならば、如何なる大政治家が出やうとも到底得られるものではない。國民が各々自から反省して、より多く努力して、より少なく消費するやうに行けば、安住の地歩は自からそこに開かれて来るのであります。(拍手)

### 十、煽動よりは警戒へ

次にいま一つは煽動よりは警戒へと云ふことであつて、煽動と云ふことは何の場合でも善くない事である。煽動するナンと言ふとノー／＼と言ふ人があるだらうけれども、ノー／＼と言ふやうな人は、自から煽動して居るから言ふと云ふ事になる。(拍手)煽動といふことは何事に就ても宜しくないが、今日のやうな思想の重大な場合——一般の思想問題でも、或は経済問題でも、労働問題でも、何の問題でも、非常に事が重大であつて、分つたやうで分らぬ所もあるのである。例へば労働問題にしても、歐米諸國も皆なこれに懐んで居るのである、向ふに立派な解決が附いて居るのをば、日本がそれをやらないならば、是は不都合だと言ふこともあるが、百三十年も掛つて歐米の先進國と言はれる國々に於て今尚ほ困つて居る問題であるから、日本人が俄に適當な解決が得られないと云ふのは、一概に悪くは言へぬことである。

何れにしても煽動と云ふ事は私宜しくないと云ふ。それよりは警戒と云つて、前に申したやうに、恐るべき思想の我國を襲はんとして居るものがあるから、國民は注意をしないと云うと、知らず識らず國家を滅ぼす先棒になるやうな事があるのである、過激思想の提灯持ちをするやうな事があるのである、死んでも死に切れないやうな過ちを取るぞと云ふことを、充分に警戒して掛かる方が宜からうと思ふのであります。(拍手喝采)

### 日蓮聖人數へ歌

妹尾義郎

一つとや、人と生れて闇の世を／＼	照し給ひしお祖師様／＼	五つとや、今や四海の大導師／＼	老いの小袖も妙の露／＼
二つとや、深き縁や荒海に／＼	咲いて薫りし青蓮華／＼	六つとや、結ぶ衣や慈悲の手に／＼	打つや華鼓のお題目／＼
三つとや、研く修行や比叡の鐘／＼	明けて旭の森の空／＼	七つとや、難行苦行も法の爲め／＼	君の御爲めや國の爲め／＼
四つとや、四ツの獅子吼に仇風の／＼	寄する御船や鹿島立ち／＼	八つとや、及の下や羅野原／＼	身に讀む經の尊しや／＼
		九つとや、心身延にすむ月の／＼	光りは永遠に増す鏡／＼
		十とや、年々祝ふお會式を／＼	飾る櫻や國の華／＼



## 佛教信仰の正統 (四)

本 多 日 生

### 第五、他を利用するの信仰

次に佛教の信仰は、唯だ個人解脱と申しますか、獨善主義と申しますか、自分だけが助ければ宜いといふやうな教ではない。それは阿含の始めからさうでないことが明かである。羅漢と言へば自分の事さへ免れれば宜い、己の苦を免れんが爲めに厭世的隱遁生活に遁入つたものだと言ふが、それは佛教を少しも見ない人が憶測して居るのである。阿含經は今尙ほ現存して居つて、澤山のお經があるが、どのお經を見て

も、佛弟子が一人でも自分さへ助かつたら他の者は構はねといふやうな事を言つて居る者はない。釋迦は誰に教へるのも、佛教の信仰に遁入つたならば、先づ「四無量心」といふものを尊べと説きました。四無量心といふのは、四つの心に無量の徳があるといふことを讃歎したので、「慈、悲、喜、捨」といふ四つであります。これはどの一つにも量ることのない偉大なる徳を含んで居るから、この四つを行へと言ふことを説いたのである。「慈」といふは人の樂みを殖やしてやる積極的に人を幸福に引上げるやうに働く事である。「悲」とい

ふのは、人が苦に沈んで居るのを除いてやる、消極的作用である。詰り貧乏して居るならばそれに食物を與へるといふやうなことが悲である、即ち救済的態度は悲である。防貧的態度即ち貧乏にならんやうに、政治なり教育なり宗教なり、あらゆる社會の組織を完備して世の中の人々を幸福にする働きは、積極的の慈である。人は多く社會事業をのみ宗教事業と見て、それが一番善い事のやうに思ひますが、社會事業は多く消極的なものである、行き倒れの人間を病院に連れて行くとか、酔つばらいを寝かして置くとか云ふやうな事は、消極的の事業である。積極的の事業は、社會の人間を堂々たる國民に仕上げ、大事業を成さしむるやうにして行く所の政治なり、教育なり、宗教なり、社會のあらゆる働きが皆大なる積極的の救済事業である。釋迦は即ち先づ「慈」を説き、それから「悲」を説きました。それから「喜」といふのは自分にと就ても世の中をクヨクヨ思つて暮してはいかぬ、精神的の喜びを増加しなければ人間には力が出来ぬ、喜びから出ない力、肝癪玉から出る力などといふものは殊な事はしない。先づ己れの精神が喜びに満ちて、而して其處に偉大なる

力を發現する。又世の中を造るに就ても、丁度今日の世界改造論者などが言つて居る議論の反對である、多くの謬れる改造論者は、世の中を反抗に導き、闘へと云ふ、即ち階級の戦争であるとか、その他總べて闘ひを奨励して居るけれども、それは根本に間違つた觀念である。「暴を以て暴に換へる」といふことは、東洋で申せば謬つたことである。「血を以て血を洗ふ」といふことは間違つたことである。左様にすれば何時まで経つても幸福なる人生は現はれて來ない。であるから反抗を説くといふことは、經濟問題であらうが政治問題であらうが、左様な事を叫んで居る者は人生を毒する所の邪説である。先づ人間は自らも喜び、さうして人の幸福を喜びとして喜悅の人生、即ち皆ながニコニコした楽しい人生を造るといふことが目的でなければならぬ。單面をして「己れ、此奴が」といふやうな顔をして、世の中に喧嘩を奨励すると云ふやうな事やつて、犬の喰ひ合ひをさせるやうな事を説いて廻つて居る如きは非常な間違ひである。釋迦は先づ人生に喜びを求めなければならぬ、自ら喜び、人を喜ばせ、總べて世の中の健全に發達することを喜びとしなければならぬと説かれた。

それから「捨」といふのは打切ることであつて、人間が詰らぬ事に精神を囚はれて、それに引張られて行つてはいかぬ、執着を打切らなければならぬ、詰らぬ事に引つかうつて、「一遍やりかけたものだから曲つた道であるけれども構はぬ、遣り通せ」といふやうな事を言つたり、或は詰らぬ事から人を恨んで、三年経つても忘れんと云ふやうな事をやるのはいかぬ。所が世の中には實際下らぬ仕事に熱中して居ることが多い、釋迦はそれを非常に諷められて居る。豚の糞を大きな容器に入れて頭の上に載せて、兩方の手で、支へて行き居る奴がある、「これは大事な物だ」と言つて一生懸命かついで行く。さうして引繰り返してはならぬと云ふので、横を向く事も出来ない、支へて居る手を下げても出来ない、その豚の糞の爲めに、何もする間が無いと云ふ風に、詰らない欲望に人が囚はれて居るが故に、唯だ繁劇なる人生となつて、唯だ忙がしいといふばかりで、少しも精神に餘裕が無い。それは何の爲めかと云ふと、下らん欲望に囚はれて居るからである。即ち豚の糞を頭に載せて居るからである、先づそれを捨てなければならぬ、人間が下らない欲望を制限せぬ限りに於ては、

善い仕事に盡すことが出来ない、であるから下らぬ欲望を捨てると説くのである。之を誤解して、釋迦が消極的な厭世的なことを言つたと思ふのであるが、さうではない、現在の文明が徒らに人間に低き欲望を煽る結果はどうであるか、今日の如く互ひに相食むに至つて居るではないか。であるからどうしても或る點に於て人間の欲望を制限しなければならぬ、協調と言つて互ひに譲ると言つた所が、やはり欲望を制限することが前提であらねばならぬ。欲望を制限するといふのは、高き欲望に人を導いて、低き欲望を滅せしめなければならぬ。或る者はパンを狙つて居る、他の者もそのパンを狙つて居るといふやうに、一個のパンを十人の者が手を出して狙つた時には、結果は必ず喧嘩になる。けれども或る者はパンを離れて静かに天の月を觀て居るとか、或る者は向ふの花を觀て居るといふ者があれば、そのパンの方に向ふ手がすいて来る。人間の喜びを單に物質に於てのみ熱中せしむるが故に、富豪もその目的は唯だパンにある、貧民もその目的はパンにある、政治家の目的もパンにある、教育家も坊主も皆なパンばかりを目的として居るといふことになるから、これはどうしても

調はざるを得ぬのである。左様にしたならば何の幸福が得られるかと云ふと、その究極は露西亞の如くに誰も彼も饑えて死なねばならぬやうになるので、餘り欲望を昇進せしむれば、その結果は共倒れである。それは簡單なものである、例へばお鉢に飯がある、それを十人の者が食ふのに、誰もみな餘計食はなければ損だといふので、三杯づつの豫定の飯を、皆なが四杯づつも食つて、人に後れてはいかぬといふので、ドン／＼掻き込んだならば、あとから来る二三人といふ者は食ふ者が無くなつてしまふに違ひない。それを皆ながお互ひに氣をつけて、「今日は少し御飯が足らぬやうだから、皆な氣を附けて食うて呉れ」といふことになつて、少しづつ皆なが加減して食ひ餘して行けば、皆なが食つても未だ二人前ぐらひは残ると云ふことになるのである。それと同じ事で、世の中は大きいと言つても理窟は同じである、諸君が一軒の家に就いてお考へになつても直ぐ分かることで、「今朝は御飯が少し足らないから、皆な腹加減を都合して呉れ」といふことになれば、あとに一椀や二椀は直ぐ残る。それが下宿屋か何かで、賄ひ征伐でもやるといふやうな風に、「ウンと食つてやれ」と

云ふことになる、豫定の通り炊いた御飯は、早く無くなつて、「五人分足らぬ」といふことになる。又炊いて持つて来ると、それも食つてしまつて、「未だ足らない、もつと炊け」といふことになる。世の中は左様にして餘りに欲望を煽つて、而もそれを積極的だと云ふから、窮するに至つたのである。釋迦は或る場合には御馳走を食へても宜しいと云ふ事を盛んに言つて居る、「御馳走をつかんで食ふ事須彌山の如くなるも尚ほ可なり」と言つた。それは即ち精神の修養が積んで居つたならば、山ほどの御馳走を一人で食うても宜しい云ふので、決して吝なことは言はない。けれども最初から人格を養成せず、唯だつかんで取つて食ふことばかりを教ゆるといふことになれば、世の中は隨ひに終つてしまふから、人をして或る程度に欲望を打切ることが教へなければならぬと説かれた。あなた方が自分の子供を教育して行くのでも、どつちを教ゆべきかを考へて御覽なさい、「何でも欲張つて御馳走があつたならば早く手を出して、掴んで取つてしまへ」と云ふやうな事を教へたならば、如何にも卑しい人間が出来てしまふ。食へたいと思つても直ぐ手を出すものではない、少しは

控へて居れしもう少し食へたいと思つても其處等で耐へて置け」といふ節制といふ事を教へなかつたならば、人間といふものは駄目であらう。子供が三人なら三人居る、其處で煎餅を買つて来てやる、さうすると三人がてんでに手を出して、パツ／＼と取り合ひをすると云ふやうな事であつたならば、小さな家庭の中に於ても直ぐに争ひが起るのである、其處を教へたのが「捨」といふ一字である。之を誤解して、佛敎が消極だとか厭世的だとか云ふのは、不明の徒が言ふことである。釋迦の如き偉大なる聖人が人生を導くのに、この點を打切らんければならぬと説んだことは、三千年の今日尙ほ少しも過ちがないのである。時に佛敎が誤つた如く思ふ人もあるけれども、それは一時の状態から觀察するからである、永遠の人生を買いて見れば、釋尊の教へは三千年少しも揺がぬ眞理を示して居るものである。

さうしてこの事は阿含の中から起つて居ることであつて、而して一切經どこに行つても、涅槃經の終ひに至る迄之を説いて居る、實にこの思想は佛敎を一貫して居る所の大精神である、釋迦が涅槃の際にも申して居る、「どうしても人間は卑阿地薄すらも尚ほ且つ親愛の心を生ぜりと涅槃經に説いてある。如何にもこれは尊いことで、この釋尊の前に集まれる者は、如何なる邪心に驅られたる者も皆な愛の精神となり、人の子を取つて喰つた鬼子母神の如き惡鬼羅刹も、釋尊の前には慈悲喜捨の精神に立つたと云ふのが釋尊の教化である。これは如何にも有難い事であつて、その他を利する所の精神は、何處にも現はれて居る。大乘の教になれば申す迄もなく利他を根本の思想として、菩薩の行と申せば衆生を濟度し、他を利益するといふ事より外ないものである。一言にして坊さんは何をされる者であるかと言へば、下に衆生を教化するといふ、その教化といふことは、廣い意味であつて、衆生を濟度するといふのである。さうしてその菩薩行を説くことは、一切經何處にでもあるので、菩薩の行を否定したナンと云ふことは無い。大乘でありながら菩薩の行をやらんと云ふやうなのはまるで意味を爲さんことである。日本人は唯だ菩薩と言へば觀世音菩薩とか、地藏菩薩とか言つて、人間より別の者があつて、賽の河原でどうして居るとか、子供を産まして呉れるとか云ふやうな事を言ふけれども、各人が皆な各々菩

しい慾望の爲めに争ひが起る、それを制限せん限りには、我は安心して涅槃に入ることは出来ない、だから我と蛇と鼠と、この三つが一つの穴の中に暮しても、相親むこと兄弟の如くならば、我れ安んじて涅槃に入らん」と言はれて居る。この我と言ひ蛇と言ひ鼠といふのは、何れも實際の我や鼠だけに限るのではない、之を現在に當て嵌めて見れば、誰にも當るのであつて、國と國との間にも我となり、蛇となり、鼠となつて居る關係がありませう、又階級戦と云ふか經濟戦と云ふか、その上にもさういふやうな利害相反したる關係のものがありませう、あらゆる勢力關係に於て我と蛇と鼠の關係がある。それが互ひに攫み合ひをすると云ふことになつたならば、あらゆる方面に於て唯だ混雜が起つて、人生の幸福は無くなるのである。釋迦が涅槃の時には、如何なる怒れる神でも、如何なる怨張りの奴でも、皆な頂を垂れて、獅子であらうが虎であらうが、皆な蹄を隠して、柔和慈悲の精神になつて居る。釋尊涅槃の像を御覽になれば分かるが、如何なる闘ひの精神に居る者も、その闘ひの精神を捨て、居る。その中には阿地薄神といふ印度に於ける喧嘩の神様も居る、その

薩に成らなければならぬと云ふことを、釋尊の教には説いたものである。人は放任して置けば生きながら修羅とも成り、餓鬼とも成り、地獄とも成るのであるから、之を能く導いて、生きて居る時から菩薩の一分に加はつて、進んでは遂に佛に成らなければならぬ。死んで後に佛に成れる位の者は、生きて居る時から菩薩化せんければ佛には成れぬ。花が咲かすには實は結ばず、佛の實を結ぶには菩薩の花が咲かねばならぬと云ふことを釋迦は説いたのである。其處で自分が菩薩になつたといふ自覺に立つと、人間は餘程淨められ、餘程立派な精神になる。肝癩が起つて來ても、「俺は菩薩である、肝癩菩薩といふ者はない……」と考へるやうになる。泥棒根性が湧いて來ても「菩薩には泥棒菩薩といふ者はない」といふことになる。然るに最初から人間は詰らぬ者である、劣等な者であるといふ風に西洋の學問は教へて居る、人間の本能といふものは、食ふ事とつるむことであると云ふやうな事を非常に強く言つて居る「儂らざる生活」といふものは、人間は食ふ目的とつるむ目的に向つて猛進する、他を顧ること勿れといふやうな事を盛んに言つた、今日はその通りに成つて居る。

左様に言はなくとも人間は低い方の慾望は、餘程節制を加へても強く現はれたがるものである、それを「遠慮會釋なくやれ」といふやうな事を言つたならば、丁度犬に向つてこの類の頭を遠慮せず食へといふやうな譯であるから、どの犬もどの犬も、先きを争うて鬪を食ふといふやうな事になるのである。人間に向つてさう云ふ低き慾望を煽り立てるやうな事を、西洋は文藝の方からも、倫理の方からも、又社會改良とか、政治經濟とか、あるゆる方面から煽つたものであるから、宜い氣になつてその通りにやり出した。今日は西洋の文明に於ては、書物の上には色々な議論があるけれども、實際の人心といふものは非常に頑固したものであつて、男女の關係であらうが、人間慾望の現はれであらうが、悉く劣等な所に陥つて居ることは、天下の識者がみな嘆いて居ることである。これが失敗でないといふならば、世の中に失敗といふ事は無い、斯く迄に出来損つても尚ほ氣が附かぬと云ふこととならば、それは最早や常識を持つて居らぬのである。今の日本の状態と雖も、一方から觀察すればその通りに成りつつあるのである、であるからどうしてもこれは菩薩の觀念に人

を導いて行くと云ふ事が大切である。無闇に低い方に人間を導いて「儼らざる告白」ナンと言つて、詰らぬ事を言ふやうになつてはいかぬ。人にも言はれないやうな恥かしい精神が現はれると云ふことは、如何にも慚愧に堪えない、洵に淺ましい事であると自ら反省して、自ら低き精神を擲へて、神や佛の前に出て恥ぢざる精神に進まうといふ努力を各人は加へんければならぬのである。

其處でこの思想は一々にお經を擧げる迄もない、殊に法華經の如きに於ては、慈悲を以て最も大事なことにせられて、佛は何處にお居でなさるかと言へば、慈悲の部屋の中に居ると云ふことを仰せられた。法華經で佛を尋ねるならば、天に御座るとか、西に御座るとか、左様なことは言はぬ、吾々がどうして佛に近寄るか、何處で佛にお會ひ申すかと云へば、如來の部屋でお會ひ申さんければならぬ。如來の部屋とは何處ぢやと言つた時に、「一切衆生の心の中の慈悲心これなり」と仰せられた。汝等の大慈悲心のその部屋で佛は會ふのであるから、汝等の心に大慈悲心の精神が動かぬ限りには、永遠に佛にお眼にかゝることは出来ないといふ法華經には説いてある。

西を向いて幾らモシ〜と言つても、此方に慈悲の精神が無ければ、佛は益々遠き所のものである。天を仰いで佛を呼んでも、己れの心に慈悲がなければ、佛は益々離れてお居でなさるといふことを法華經には説いてあるが如何にもこの點は立派な宗教であると思ふ。

日蓮聖人もやはりその意味から「諸法實相鈔」に仰せられて居る。

鳥と蟲とは鳴けども涙をちらず、日蓮は泣かねども涙ひまなし。

と仰せられた。この一言に日蓮聖人の御人格が現はれて居ると思ふ、鳥や蟲は聲を揚げて啼くけれども、彼等は涙を流さない、悲んで啼く譯でもない、唯だ聲を揚げて居るだけである。悲しさを鈴蟲の聲がして居つても、決して悲んで居るのではなくして睡を呼んで居るのであるから、涙は流しはしない、鶯が啼いても涙は流しはしない。けれども日蓮聖人は、日本男子であるから聲を揚げては泣かね、これが支那人であるならば大きな聲を揚げてワツ〜泣く所だけれども、日蓮聖人は泣き方が別ナンである。これも私餘程面白いとい

思ふ、これを惡口言ふ人もあつて、同じ泣くならば儼らずにワツと泣けといふけれども、男がさういふ大きな聲を揚げて泣くのは見つともないから、聲を揚げては泣かんけれども、その眼から暗涙滴々として禁じ難い。

此の涙世間の事には非ず、但偏へに法華經の故也。若し然らば甘露の涙とも云ふべし。

この涙は世間の事ではない、世間の名譽が得られぬとか、自分の目的が達せられぬとか云ふ、自己の慾望に依つて泣いて居るのではない、唯だ偏へに法華經の爲めである。法華經の爲めと云ふのはどういふ事かと言へば、法華經の教に基いて其處に現はれて居る本佛を紹介し、其處に現はれて居る信仰を教へ、其處に現はれて居る唯今申す慈悲の精神を以て、人を菩薩の行に立たしめ、この法華經に依つて現在の幸福、未來の成佛すべてを與へ、國に取つては正法を立て、國を安らかにするといふ、個人、社會、國家すべてを救済する所の大精神の爲めに、日蓮は涙を流して居るのである。どうぞこの人を教ひ、この世を教ひ、この國を教はうと思つて、この慈悲の精神に動かされて、涙を流すのであるから、この日蓮の

涙は甘露の涙であると言つても宜いと自ら稱賛せられた。これは實に、えらい事と思ふ、如何に文藝家と雖も、自分のこの一滴の涙は甘露であるといふ事は、中々書けないものである。あなた方も幾度か涙を流したらうけれども、その涙がどれ程の値打があるか一つ考へて御覧なさい、「彼奴が俺の悪口を云つた、思々しい」と云つて流すやうな涙は、二錢五厘か一錢八厘位である、商賣に損をして困つたと思つた所で、その涙は大した値打ではない。總べて人間の涙の價值といふものを自ら考へて見ると、その時は尤に思ふた涙でも、例へば日が暮れがけになつて、何となく悲しいと思つて流したもので、唯だ厭世悲觀のやうな神經衰弱のやうな心で涙が出るのである。聲を揚げては泣かないけれども、ホロ／＼と出ると言つても、その涙は酸っぱいやうな味がするかも知れぬ。逆も「俺のこの一滴の涙を替へて見よ、何とも言へぬ甘露の味がする」といふやうな事は、中々言へるものでない。此處に私は眞正なる佛教があると思ふ、この日蓮の言つた「流す涙が甘露の味がする」といふ一言に於て、眞正なる佛教の信仰が現はれて居ると思ふ。

聖人の慈悲の自信力といふものが強く見られるのである。それは逆も我慢や剛情で言へるものではない、あなた方が一つ法螺を吹いて見やうと思つてやつて御覧なさい、「一切衆生の一切の苦みは俺一人の苦みぢや」と言へるかどうか、これが言へれば、私はこの點に於て日蓮聖人の人格を思ふ。日蓮聖人はあれだけの謙遜な人でもあり、釋尊に對しては絶對の信仰を持つて居る人であつた、或る場合に於ては、法螺などを受けたことから言へば、釋尊の一切衆生濟度の爲めにお盡しになつた勞苦に比すれば、日蓮が五十年の奮闘などお盡しにもならんと言つて謙遜して居られるのであるけれども自分の慈悲といふことに至つては、佛に一步も譲らないやうな元氣を以て言ひ現はされた所に、私は日蓮聖人の慈悲の活躍といふことが非常に強かつたと思ふのであります、であるから「日蓮が慈悲廣大なれば」と言つて、俺の慈悲が廣大であるから必ずこの教は弘まる、唯だこれは冷やかな理窟から出たのではない、無論眞理の研究に於ても一步も違はないけれども、尙ほそれに無限の慈悲を加へて奮闘して居るこの日蓮の主張は、決して減じないと言はれた。これも實に立派な

新様にして日蓮聖人は信仰のそこに慈悲が輝いて居る。「日蓮が慈悲廣大なれば」と云ふやうに、日蓮聖人は慈悲の點に於ては少しも人に譲らない、釋尊如來は「一切衆生の異の苦を受くるは、如來一人の苦なり」と言はれた。大勢の者が違つた苦みを受ける、或る者は親を失うて泣き、或る者は妻を失うて泣き、或る者は火事に遭つて泣き、泥棒は捕まへられて泣く、子供は饑頭を落して泣く、一々泣く事柄は違ふけれども、その當人に取つてはその時の悲しみに違ひない。それを如來は自分の苦みの如くに感じて「あゝ可哀相に……、彼は泥棒したには違ひないけれども、捕まつて行く、この寒い時に牢に入れられて居るのは、堪つらい事であらう」と云ふので、一切衆生の様々なる苦みをするのを、悉く如來一人の苦として感ぜられたといふ涅槃經の文を引いて、更に日蓮聖人は少しも遠慮をしない、「如來は斯う言はれたが、日蓮は斯くまで大きくは現はれんけれども、それに似たやうな意味に於て」と仰しやるべきだけれども、少しも遠慮せられない、日蓮曰く「一切衆生の一切の苦みを受くるは、日蓮一人の苦と申すべし」とその儘日蓮聖人が言つて居られる所に、日蓮

事である、自分の主張は俺の慈悲が加はつて居るが故に、この日蓮の主張は必ず弘まると言はれた。これ等の點々を併せて考へれば、日蓮主義の信仰は佛教正統の信仰に一致して居るのであつて、即ち佛教の信仰は他を利用する所の信仰である。獨善的にあらず個人的にあらず、悲觀的にあらず、他を濟度し他を助くる力が現はれて居る所の教である。それであるから日蓮主義の傳播が世を救ふ所の力となつて現はれて來るのであります。

(未完)

### □本多大僧正中播の大師子吼□

▽兵庫縣姫路市並に加西郡に於ては、四月二十一日本多大僧正を招聘し、民力演義の主旨を徹底せしめんが爲に大講演會を開催した、加西郡に於ては郡教育會が久しき已前から大僧正の講演を懇望して居たので、開會の定刻午後一時を待たないで、聴衆は會場たる郡公會堂の揚式館に溢れて居た、宮地郡長の開會の辭に次で直ちに大僧正は「精神修養の大綱」と題し、二時間に亘る大講演を試みられた、聴衆は所謂郡の智識階級を網羅して約千五百を數へた。夜は午後七時より姫路市主催で市内山陽座に開かれた、又之れ未曾有の盛會で聴衆千七八百、市の社會課岡部久氏開會の辭を、杉山市長講演會開會の主旨を、大僧正の講題は「民力演義に就て」であつた、而して二時間餘の大師子吼に聴衆は醉えるが如く、姫路市近來の大講演會であつた。

# 日本國の使命

陸軍少將 野澤 悌 吾

私は本多親下に先立つて、この日本の思想界の現狀に鑑みまして、吾々日蓮主義者の奮起せざる可からざる時期であるといふ事を一言述べて見たいと考へて居つたのであります。が、電車の従業員に依りまして大變時間を費して、遂に親下の後で講演を致すやうになりました。

私が嘗て第二師團の參謀長を致して居りました際に、參謀長の室に備へてある機密の箱を開けて見ました所が、その中に、「師團長の外開封を禁ず」といふ封筒に入れた書類がありました。師團長の見るべき物は參謀長が見ても宜いのでありますから、私開封をして見ました所が、それは社會主義の宣傳の計畫の梗概を書いたものであります。私は非常に驚いた、それ迄社會主義の何物たるかを知らずに居りましたが、簡單なる印刷物でありましたが、陸軍省から廻して來てあつ

たものを読みまして、非常に驚いて、これは容易ならぬ思想である、吾々は日蓮主義の全豹が解つては居らぬけれども、併しこの主義に對して對抗の策を講じなければならぬと考へまして、諸所に國體を中心にしたる思想を以て講演を試みつゝ歩いて居つたのであります。本日本多親下の御講演に依りまして、この社會主義、過激思想の起源并にその傳播の計畫宣傳の勢力、尙ほ日本の現下の思想界が如何に過激化して居るかと言ふ事を承りまして、非常に感慨が深い譯であります。皆様も御同様であらうと考へます、斯の如き意義ある御講演の後に出まして、私が更に附加すべき言葉は無いのであります。が、立ちました序でに一二所感を述べて見たいと思ひます。

正しき思想といふものは無いので、例へば人間の理智といふ方に趨るといふと、その理智、人間の感覺の智識といふものに偉大なる權威を認め、それ以上の智識といふものを否定して、例へば人間が科學で立證することが出来る事ならばそれは信するけれども、それ以上の哲學であるとか、或は宗教の思想といふものは重んじないといふやうな偏つた思想が出て居る。又或は權利といふやうな法律で規定した事は非常に之れを尊重しますけれども、それと同時に温かい所の精神を認めて行くといふことはようやらぬ。日本に於きましては、封建時代に於ては御承知の通り武士道が非常に盛んであります。今日の軍隊でも軍紀といふものは非常に厳肅であります。その軍紀が嚴肅である、武士道が盛んであるといふ一面に於て、非常な情け、仁慈の觀念といふものを養つて來て居る。武士道の根源といふものは色々に申しますけれども、結局やはり、仁の觀念である、即ち仁の觀念を義の上に於て行

うて行くといふに外ならぬのである。

私今日汽車の中で書物を見まして、非常に感じたことがありますが、徳川三代將軍の乳母であります例の春日局といふ

一體歐羅巴の思想は本來生れが偏つて出て來て居る、一も

人がある、その人の子供に稲葉丹後守、その弟の式部といふ二人の子供があつた。その式部が今日で申せば不良少年であつて、あらゆる悪い事をする。丹後守は、家光將軍と乳兄弟である式部の品行の悪いといふ事は、單に稲葉家の名譽を汚すのみではない、將軍に累ひをなすものである、自分は一身を賭してもこの弟を救さなければならぬ、所謂武士道の上から、今日の言葉で言へば軍紀を革清する爲めに、親を滅するといふ態度に出なければならぬと考へた。その當時の思想としては無理からぬことであつたのでせう、その時に之れを誰に命じたら宜からうかと云ふので色々物色致しまして、自分の家來の甲賀孫兵衛といふ十六歳になる青年を呼出してこの事を命じました。所が孫兵衛は暫し丹後守の顔を見守つて申すのに「成る程式部様は非常に品行が悪いことではありませうけれども、あなたとは血肉の關係である、兄として弟を殺すといふことは如何なものでございませうか、願くは更にお考へを願ひたい」と言つた。丹後守はこの言葉を聞くと、「お前は躊躇して居るのか、さう云ふ事ならば他の者に命じやう」と申しました、すると無論名を惜しみ武勇を尙んだる當

時の武士でありますから、十六歳の青年たゞは退きません、「私を願ひねけとお考へになるか知りませんが、然らば私は断然立つて命に従ひませう」と言つて、自ら行かん事を求めて許可を得た譯であります。その際に更に申すには「願ひば私に檢使を一人つけて貰ひたい、私が願ひねけであるか否やを見て貰ふ爲めに檢使をつけて欲しい」といふ事を願ひました。丹後守は「それには及ばぬ」と言つて宥めましたけれども、どうしても肯かない、所謂名を惜む所の武士でありますから、その檢使の眼の前で立派な劍きをして見せやうといふ考へで、強ひて檢使を付けて貰つて行つた。式部の所に来りますと、式部は何事か起つたといふ事を感付まして、劍を按じて立つた。その時に孫兵衛は「私共は丹後守よりあなたに申上ぐべき事を承つて多つたのであります、別に他意ある譯ではありませぬ」と言つて、大小を抜いて後ろの方に遠く残して置いて、さうしてツカ／＼と前に進んだ。式部は劍を按じて立つて、イザと言つたら一刀兩断と構へて居りましたけれども、この刀を指いて進んだといふ事に就て、彼の智慧に負けたのであります。孫兵衛はツカ／＼と近付いて行く

あります。即ち式部の一生を見届けて、式部をして再び過ちを起さしめないやうに、終世これに附いて守つて行かうといふ考を以て、孫兵衛は自分の一生の利も名も、總べてを捨て、之れを守護しやうといふ考へであつた。その後若干年を経まして、勿論酒と放蕩に持ち崩した身體でありましたから、十分鐘が入つて居つた爲めでありませうが、健康を害して式部は遂に亡くなつた。茲に於て孫兵衛はその仁の考へから式部をして天命を全ふせしめ、又式部の兄弟丹後守をして弟を殺したといふ不名誉を免かれしめたといふことが書いてあります。是が昔の武士道の眞の精神であつたのであります。斯ういふやうな例を他に求めて見ますと、澤山あるのであります。齋藤監物といふ人は水戸藩の神主でありますが、水戸様がお祭りをする爲めにお出でになつて、その時に祝詞を讀む、所が祝詞を讀む際に監物が讀み誤ひをした、その當時の軍紀から申しますと、神主が自分の職業たる祝詞を讀む上に於て讀み違ひがあつたといふことになつたならば、これは武士道の方からどうしても腹を切らなければならぬ事である、何れの世の中でもチヨコ、どいなる人間の多いものであります

と、直ちに式部を取つて投げつけてしまつた、さうしてその上に馬乗りに乗つて、懐に呑んで居つた九寸五分を以て胸に當て、檢使を顧みて、「甲賀孫兵衛は決して腰抜けでは御座らぬ、この状況を速に行つて御主人に報告して貰ひたい」と言つた。檢使はその言葉に従つて直ちに馬を馳せて丹後守の邸に歸つた。此處迄は所謂武士の大切な軍紀の方面であつた、けれども彼の根本には非常な仁慈の心を持つてこの仕事をやつて居る。檢使の姿の見えなくなるのを見るや、直ちに九寸五分を鞘に納め、式部を起して「さて式部様、あなたは將軍と乳兄弟でお居になつて、さうしてこの亂行は何事でございますか、あなたの亂行を見兼ねて、あなたの實見たる丹後守は、弟を殺す所の不名誉を買はなければならぬ譯である、これも武士道餘儀無い譯であります、總べてこれはあなたの心から生ずるのである。併し私に今殺されたといふお考へを以て、再びお生れ代りになつて、この罪をお償ひなさい」と言つて諫めた、最早や殺されんとしてさういふ優しい言葉を聽いたものでありますから、式部も深く悔悟した、この悔悟を利用して孫兵衛は共に手を携へて逐電をしたので

その時殿様の側で居つた一人の巨下が、「唯今神主は祝詞を斯う讀むべき所を誤つて斯う讀みました」といふ事を申上げた。殿様は無言その事を知つて居るけれども、若し之れをさうだと言へば齋藤監物はそれが爲めに腹を切らなければならぬ。其處で殿様の仁愛なる心は其處に輝いて「イヤ、俺はさう聽かなかつた」と云ふ御一言で、事ゆる無く済んだと云ふことであります。又明治天皇陛下が御所の境の上にお立ちになつて、市街の状況を御覽になつて居つた際に、侍従武官の某といふ人が、自分の同僚の一人と能く體格が似て居らつしやるものであるから、同僚と見間違へて後ろに行つて背中をポンと叩いた、後ろを振向ひて御覽になつたその御顔を拜すると陛下であるが故に、その侍従武官は面色土の如くに變つて、釘附けになつたやうに手を舉げて敬禮をした、陛下はあの通りの仁慈の心に満たせられて居るお方で居らせられましたから、「あゝ、自分の背中に先程敷を滑つた際に塵がついて居たらう、もう少し能く拂つて呉れ」と仰しやつた、それで事ゆゑ無く済んだ。

斯の如く總べて非常に規律的な嚴格な方面がある時に於て



は、それを緩和する爲めに柔らかない方面が是非とも無ければならぬ、日本の武士道などはそれですつと成立つて来て居つたのであります。所が歐羅巴は、權利義務と申しますと權利義務の方にばかり越えてしまつて、片方の柔らかない大切な方面を忘れてしまつて居る。歐羅巴人の本來の思想がさうである。又博愛人道といふ事を申しますと、國家といふものを全く離れて博愛人道を設いて居る、基督教の如きは即ちそれでありませう。日本の建國の大理想は皆様も御承知の通りに「天業を恢弘して天下を光宅せん」といふので、天の運かいかを以てこの地上の文明を開拓して、人類をして悉く向ふべき所を知らしめ、眞の幸福を興へやうと云ふのでありますから、今日の所謂建國の理想を以て正義を擁護し、而して國家の光に依つて文明を開拓して行かうといふ、國家と正義、國家と人道といふものを離さずに進んで行く思想である。然るに彼等は片方の正義人道の方面のみを考へて、國力との調和を全く理想して居らない、何時も斯ういふやうに偏つて居る。又人格主義を唱へた所の思想からは、遂に自我の方面に進入つて居るが、その自我の思想といふものは、自我とは何かと云

であつても、第四本能といふものが人間の本性であるといふ、第四本能とは即ち共同生存である、この共同生存を實現する爲めに相互扶助をやつて行く、其處までは宜いけれども、それを唯だ物質の方面のみに依つて解決して行かうとして、道德の方面といふものを全く忘れてしまつて居る。さういふ偏つた思想を以て最初から出發して来て居りますから、永久にその思想といふものは調和を遂げて居らぬ、理想と現實、精神と物質、平等と差別といふものゝ調和が一向取れて居らぬこれは西洋人の頭ではどうしてもさうでありませう。

我國の三千年來養はれたる日本人の思想は、理想の方面と現實の方面と始終調和して進んで来たのであつて、その吾々の同胞がこの社會主義の宣傳の計畫に動かされると云ふやうな事は、容易には無からうと、私共も當初信じて居つたのであります。併しこれは治斷がならぬから、どうしてもこれに對抗の策を講じなければならぬとその當時考へて居つた。所が現今の状況を見ると、労働運動は既に労働運動の範圍を超越して、今や過激化して居るのであります。政治運動——普通選挙運動も同様であつて、その本然の意味から寧ろ飛び

ふと自分が判断をする、彼の自我はそれだといふやうに判断をして行くのであつて、其處に道德の方面、人間の清淨なる本性といふものを見て居らない。日本の思想でありませうと、一方に人間の罪惡面を觀ると同時に、一方には強く人間の清らかなる本性を觀て居る、其處に調和があるけれども、彼等は何時も一方しか觀て居らぬ。さういふ曲つた頭を以て今日まですつと文明を進めて来て居るのでありますから、それが自然に實利主義の方に傾き、國家觀の方に移しては遂に軍國主義となり、正義人道を無視して行き、或は産業帝國主義となつて人間の生血を吸ふやうな策略を遣らして進んで行く。云ふやうに走せて行くのは、當然の事であつた。又人間の本性といふものを考へて行くに就ても、進化論に基いて、生存競争といふものが人間の本性であると言つて、人間の徳性と進む、或は人間の本能といふものが直ちに本性であるといふやうに考へて、清らかなる方面を觀ないで進んで行く、或は基督教の如くに、罪惡が人間の本性であると言つて、茲に覺性の開發すべきものある事を忘れて居る。或は社會主義

越えて過激化して居る。八幡製鐵所の事件と言ひ、或は今日でも東京の電車の従業員の勢ひと云ふものは凄まじいものである、これに對して學者も、一般の民衆もどちらに同情して居るかといふと、寧ろ屬々方に同情して居る、皆笑つて之れを一種の快感を以て迎へて居る、私は今日非常に憤慨に堪へなかつたから、電車の中で従業員を捉へて「君等は何をするか、君等が怠業をやる爲めに、二百萬の東京の民衆といふものは非常な困難に陥つて居るぢやないか。殊に無資産階級の人といふものは、電車の交通に依つて日常の生活を營んで居る、實に大切な交通機關である。君等は唯だ自己の賃銀の問題の爲めに、市民全體に非常な迷惑をかけてそれで宜いか」と言つてやりました。最初は私を説んで居りましたが、私の勢ひが餘り鋭かつたので、遂に變な顔をして向ふに逃げてしまつた、私は非常に憤慨に堪へん、一般の人は之れを笑つて、快感を以て迎へて居りますけれども、快感を以て迎へべき時期ではないと思ふ。社會主義の宣傳の計畫に對して、三百萬圓の金が外國から導入つて来る、基督教は之れを甘んじ受けて居る、或は五百萬圓の金が何處からか導入つて来る、

本月十三日迄の調査に依れば、十八萬圓が一口と十五萬圓が一口と請取られて居る、その後はどうなつたか聞きませぬけれども、學者が之れを受取り、政治家が之れを受取り、さうしてこの社會主義の宣傳の先陣に立つて行くといふことはどういふ譯であるか。一般の民衆は是等の事を一向問題外として居つて、唯だワイ〜と騒ぐ者に同情を持ち、之れを快感を以て迎へて行くといふことはどういふ譯であるか。然かし日本人の頭は本來さう言ふ工合に傾いては居らなかつた、日本人の頭は本來調和された頭であつて、日本の思想といふものは餘程整つた思想を以つて、吾々の祖先からすつと來て居るのである、然るに今日斯の如き状況になつたといふことは由々數大事である。これは單に社會主義者から金を受取つて、國家の力を破壊し、社會の總ての秩序を破壊しやうとする、さういつた風な、奴等のみ責任ではないと思ふ、吾々國民全體の責任である、吾々が社會の制裁力といふものを全く無くなしてしまつた結果である。明治維新の大業といふものは、或は王政復古を庶幾ふとか、或は攘夷とか色々々の議論もありましたけれども、皇室中心といふ頭を持つて居らぬ人は

無かつた。正義の爲めには天誅組といふものも起つた、誤解はあつたけれども兎に角正義に及向ふ者は打倒せといふ思想が非常に湧いて來ましたから、あの維新の大業が立派に出來たのであつた。今日斯ういふ風に一般の思想が段々過激化して來て、國家の力が漸次薄弱となり、社會の秩序は漸次破壊せられて行くやうになつて來たといふのは、決して一人や二人の責任ではない、國民全般の責任だと思ふ。吾々の頭が間違つて居る、吾々が眞に覺醒をして居らぬのである。外國との關係で國際聯盟を見ても、日本の立場といふものは今非常な苦しい、實に國歩艱難の状況にある、之れを日蓮聖人のお言葉を借りて言ふならば、他國侵逼難が今や刻々に迫つて居るのである。米國はどうでありますか、東塞加の方面に於て土地を獲やうとして居る、さうして軍艦を増加しやうとして居る。彼は激語して曰く「吾に二百艘の軍艦あり、日本何ぞぞ、吾等一度牙を執つて立つたならば、日本を粉砕する」とは譯は無い、彼は平時に於て既に吾々の意志に屈服すべきものである」といふ事を激語して居るではありませんか。而かも東塞加に更に足を跨いで行かうと云ふのは、彼の日露戰

争の時を事々御覽になつても分かるのであります、露西亞軍は海軍の一枝隊を以て北方の方から牽制を行つた、あの時に上村大將が向ふに行かぬのが悪いと言つて、日本の國民のワイ〜連中は、上村將軍の家族に向つて石を打つけたと云ふやうな馬鹿漢があつたのであります、その當時上村將軍は、如何なる侮辱を受けてもこの兵力を分けるといふ事になつたならば、日本の海軍は益々力が分かれる、さうしてあの強大なる露西亞の海軍を打潰すといふことが出来なくなる、だから涙を吞んで忍んで兵力を分けなかつたのである。而して遂に露西亞の海軍を御承知の通りに打破つてしまつたのである。今日亞米利加が平素から一枝隊を向ふに差遣すべく計畫して居るのも、日本の海軍に對抗する策である。さういふやうな關係を段々に考へて來ましたならば、今回の支那に對する四國借款でも同じ事でありませぬ、山東省と滿洲、これは日本の勢力範圍であるから、此處に手を出さうとして居つた、併し日本にも沈石眼の明いて居る人があつたから、山東省と滿洲を除くと云ふ事に依つて、日本も四國借款の中に這入らうと言つたので、パタ〜とこの計畫が一時頓挫してしまつ

た。總べて彼等のやり方は、亞米利加一國に就て見てもさうである、英吉利の爲す所、佛蘭西の爲す所、その大小こそあれ日本に向つて爲しつゝある所の行動といふものは、吾々が朝らかなる眼を以て見たならば、確かに他國侵逼難と見なければならぬ、實に危い状況であります。勞働問題でもさうである、國際勞働會議ナンと言つて見た所が、これは日本の勞働賃銀が從來安かつた、さうして世界競争の時に方つて、日本の貨物といふものが歐羅巴の市場のあらゆる方面に行つて、非常な勢力を以て方々に賣れた、品物は悪いけれども兎に角安いから、之れを高くさせるには勞働賃銀を上げさせなければならぬといふ國際上の關係から、矢張り彼等は畫策して居る。昨年十一月の新聞を見ても、英吉利のゲデスが大きい喜んで居るではありませんか、「日本も最早や恐るゝに足らぬ、勞働賃銀が非常に騰つて來た、最早や彼等の拵へる所の品物といふものは、歐羅巴の市場を壓倒する力は無からう」と言つて歡んで居る。さういふ工合にあらゆる方面から日本に對つて内侮をして來て居る、之れを他國侵逼難と考へずには、何をか他國侵逼難といふべきか。その上に今の税下のお話

もあつた通り、思想の方面から過激主義の蛇が頭と尻尾を結びつく可く、日本に向つてドン／＼多額の資本を投じて、社會主義の宣傳をやつて居る。宗教を藉りて、へな／＼この學者を藉りて、政治家の馬鹿共を藉りて、その思想の宣傳に熱中して來て居る。國內には譯の分らぬ奴等がワイ／＼言つてこれに煽動されて居る、非常な危険な時機であります。

斯う云ふやうにならうとは、私共は實に豫期しなかつたので、もつと樂觀をして居つたのであります。併ながら今日斯の如く陥つた現状を見て、實に慄慄に堪へん。吾々の祖先は何をしたか、吾々の祖先が今日まで文明を開拓して來ました歴史に鑑みたらば、彼等は儒教の遺入る前に於て能くこの日本の國家といふものを理解して居つた。彼等は日本の建國の事實の非常に尊いといふ事を知つて居つた、さうしてその事實の奥にある所の建國の大精神といふものが露はしいといふ事を知つて居つた。國家の理想を以て文明を開拓して行かうとする所の計畫を持つて居つた。而かもその國家の理想といふものは、決して歐羅巴の思想の如く偏つたものでない、所謂天地の大法に基いて國家の理想といふものが養われ

める思想もありましたけれども、大體に於て日本の佛教の正しい系統に於ては、さういふ偏つたる思想は無かつた。宇宙觀の方面でも平等と差別との立派な調和を見て行つて居る、人生觀の方面に於ても人間の罪惡面と靈性といふものを觀て靈性を開發すべき事に最も力を入れて、その開發に従事して行つた。倫理の方から言つたならば、西洋倫理は功利主義であるとか、様々の事を倫理史で擡げて居る、その主義の名ばかりを拾つて見ると二十幾つばかり並べられる。さういふもので殆ど倫理を論ずるの綱格とすべき立派なものは、何もありません。けれども日本の倫理觀で申しますと、佛教の思想、儒教の思想を以て、茲に倫理觀といふものを立て、個人といふものは唯だ個人としてのみ生存して居るものではない、宇宙に屬するものであり、而して國家に屬するものであり、社會に屬するものであり、家庭に屬するものであり、職業に屬するものである。このあらゆる屬する方面の全體に合ふやうに倫理の綱格を定めて行かなければならぬといふ所から、佛教の四恩の教、六恩の教といふものを尤揚し、さうしてその中心に持つて行つて更に統一點として忠といふ觀念を以て

居つて、それを中心にして儒教を造へた。儒教を迎へるに方つてや、建國の精神國體の本義といふものに照して、能く淨瑠璃の鏡を以て向ふの思想を照して、その中の國體に反し、建國の精神に反したるもの二三を除いてあと全部を包擡してさうしてこれに特別なる日本の精神を與へて行つた。さうして本來素朴なる所の日本の道徳といふものを非常に豊富ならしめた。次で佛教の遺入つて來るに當つては、やはり同様に國體の本義に照し、建國の精神に基いて、その中にある所の獨善主義であるとか、或は厭世主義であるとか云ふものを排除して、直ちに大乘佛教に進んで之れを包擡して行つたのである。而かも佛教の有つて居る所の深遠なる哲學を以て、國體に眞の意義ある所の深い意味を持たせた、日本の從來の文明といふものを持つて行つて、深い意味を與へて行きつゝ進んで來た。それでありますから日本人の哲學思想から申しまして、道徳倫理の方から見ましても、國家觀から見ましても、日本人の思想といふものは非常に整うて居つた。それは中には現實と理想といふものを離して、この現實の世の中は世の中として、別に理想境たる西方の淨土といふやうなものを求

一切を統一して行つた。斯の如く統一あり、さうして何れに行つたからと云つても、まごつかないだけの倫理觀といふものがあつた。又國家觀の方から言ひましても、先程申したやうに「皇孫正しきを養ふの心を弘め」といふやうに、所謂正義を擁護して行くといふことは、仁愛の精神を根本にして行く。さうしてそれを國家の力に依り國家の光に依つて現實して行かうといふ、立派な理想的國家觀といふものが出來て居つた。斯の如く吾々の祖先は能く己れの國に在る所の長所を擡げてさうして外來の思想を能く鉄線し、取捨し、包擡し、統一して今日まですつと進んで來たのである。實にこの日本の思想史と申しますか文明史と云ふものは、世界に於ける文明史上の偉大なる一偉觀であると思ふ。他の諸國に於て斯の如き立派な例は無い、横文字を書いてあるからそれが立派なやうに見えるけれども、縦に書いたものが横に書いたものより悪いと云ふ事は無い、日本の文明史の全體を見たならば、日本人の吾々祖先の力の非常に偉大であつたといふ事を、私共は今更ら誇りと思ふのである。

# 我等の準備

海軍中將 佐藤鐵太郎

御承知の如く私は海軍の軍人でありませんが、此の頃のやうに世の中がむづかしくなりますと、何を申しても若干差障りがあるつて、半分ぐらゐ口を塞がれて居るやうな状況であります、現役軍人といふものは眞にうるさいものでありまして、ちよつとも講演が時勢の事に馳せたり、或は政治の問題に觸れますと、譬てそれが本分に背くといふことになりました大變申し悪いのであります。今日は良いが悪いが知りませぬけれども、軍人といふ心持を取去つてしまつて、本多大僧正親下の御指導の下に日蓮聖人のお弟子になつて居る佐藤が、此の見地から皆様に申上げる積りでありまして、併し背後にはやはり現役軍人といふ身分がありますから、皆様の御満足な講演は出来ぬかも知れませぬ、西伯利問題がどうだ、朝鮮問題がどうだ、労働問題がどうだといふやうな事を申上げたな

らば差障味がありませんせうけれども、さういふ事は殆ど口を塞がれて居りますから、唯日蓮聖人の門下生たる佐藤が、時事に就いて感ずる所を申上げるに止めます。私の演題は「我等の準備」といふので、吾々は如何にして此の世の中に於て準備すべきかといふことを申上げたいのであります。

御即位遊ばしました前の年を考へれば、今年がどういふ工合の年であつたかといふことがお分りになりませうが、來年は其時から丁度四十三回目の本封がへりでありまして、本封がへりと言つては可笑しいですが、四十三回目の六十年であります、即ち來年は紀元二千五百八十一年で、辛酉の年であります、さうして此の辛酉は、丁度日蓮聖人が伊豆に流されました年の干支に當ります、その前の年即ち庚申といふ今年の干支に當る年は、日蓮聖人が「立正安國論」を書かれて北條氏に上まつられた時で、龜山天皇の御代、日蓮聖人が三十九歳の時であらせられました。それが神武天皇御即位後三十二回目の六十年に當りまして、日本の曆では神武天皇の御即位後千九百二十年であります、其の年に日蓮聖人が立正安國論をお唱へになつた。此の千九百二十年といふのは思ひ出の深い年であります、丁度西洋の紀元で申しますと今年は千九百二十年であります、即ち西洋紀元の年数を日本に持つて参りますと、丁度日蓮聖人が立正安國論を書かれた時である。さうして日蓮聖人が立正安國論をお書き遊ばしました其の當時の有様と今日此の頃の有様といふものは、甚だ能く似て居る

今年には不思議な年でありまして、吾々世俗に生れて六十年を過ぎて六十一歳になると本封がへりと謂ひます、即ち十千十二支の結びつきが六十年であります。其の六十年を一廻りと致しますと、神武天皇様が御即位になりました年は辛酉でありまして、是は明年に當ります、今年庚申でありますから、丁度其の前の年であります、紀元節は二月でありますから、主なる大事件のあつたのはやはり庚申の年であります。日本の歴史の上を見ましても、神武天皇様が橿原の宮に

と思ふ。此の間も私は大崎の日蓮宗大學の釋尊御降誕會に招かれまして、やはり「我等の準備」といふ題でお話した中にも申述べましたが、今年日蓮門下の中の誰かから世界的立正安國論を唱ふべき秋ではないか、世界的立正安國論とはどういふ事か、それは段々是から後に申上げる事でお分りにならうと思ひますが、苟も日蓮の法脈を正當に承けられた所の日蓮宗の——「宗」といふのは何も小さな意味ではありませぬ、宗派などが分れて喧嘩をして居りますのはあれは皆汚ない話で、あんな事は吾々の眼から認められませぬ、兎に角日蓮聖人の門下の正統と名けて居る所の僧侶方から、立正安國論を今年叫び出さなくては、何れの秋に叫び出すか、未だ諸君は準備が附くまい、準備が附かねば實に大法の宣傳を怠るものであつて、情けないと謂はなければならぬ、出来ぬながらもやらなければならぬといふやうな意味の事を申しましたが、是は必ずしも悪口ではない。今日は二月二十二日でありまして、釋尊御降誕の時には當りませぬが、今日十五日、御降誕の前日におやりになる今日の會を、どういふ御都合であつたか延ばされたので、やはり今日も御降誕を祝する意味

と思ひます、旁々同じ心持にもなりまして、今日もさういふ事を言ひたいのであります。それで今年(庚申の年)即ち西暦の千九百二十年に當る日本の千九百二十年は、神武天皇御即位以來三十二回目の六十年で、丁度日蓮聖人が立正安國論を唱へられた年であります。

日蓮聖人ば『立正安國論』にどういふ事を仰せられたか。是は諸君も能く御承知でありませうけれども、今日注意すべき點が多々あります、其の中でも尙ほ自分の頭腦に感ずる點は、

善神國を捨て去り、聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り鬼來り災起り難起る、言はざるべからず、恐れざるべからず。

善い神様は國を見捨てて天に行つてしまひ、聖人は所を辭して何處かにお出でになつて歸らぬ、丁度昔からあつた善い思想が國を去つて、昔から吾々が尊んだ所の聖賢の教は何處かへ行つて歸らない、それだから色々の悪思想がやつて來て、魔も來たり鬼も來る、さうしてそれと同時に人心動亂して災難も起る、何にしても恐ろしい事であると仰せられて居る。此

しまつたならば、神様も、法も、總ての道も眞理も誰も貴む者は無くなる、それだから先づ國家を祈つて然る後に佛法を立つべし——茲には「佛法」と仰せられますけれども、是は吾々の行ふべき道、思想であります、先づ國家を祈つて後吾々の踏むべき思想を打立てなければならぬ、唯、うか／＼と外國のものが善ささうに見えるからといつて、それに盲従すべきものではない、此の國を鑑みて引むべきものであるといふことを仰せられたのが、立正安國論の最も強い所だと思ひます。それから最後に斯ういふ事を仰せられて居る。

悲しい哉皆正法の門を出で、深く邪法の獄に入る、愚かなる哉各々惡教の網に懸りて、鎖に誘法の網に纏はる、此の曠野の迷夜の盛焰の底に沈む、豈愁へざらんや、豈苦しからざらんや。汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして心は是禪定ならん。

悲しい事には日本國の人々が皆正しい法を捨てて邪法の地獄

の「善神國を捨て去る」といふやうなお言葉は、どういふ所から出て居るかというところ、やはり日蓮聖人が安國論に引證して居られますが、即ち『仁王經』に、

國土亂るゝ時は先づ鬼神亂る、鬼神亂るゝが故に萬民亂る。

といふ事がある、即ち「鬼神」——「神様」といふやうな事は、思想上に關係したことを仰せられたのであつて、思想が亂れるというところ、人心が亂れるというところ、國家が亂れて來るといふことを仰せられた。日蓮聖人は今から約六百六十年前にさういふ事を仰せられたのであります。さうして日蓮聖人の御主張になる所はどういふ事であつたかといふと、

國は法に依つて昌へ、法は人に依つて貴し、國亡び人滅びなば佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや、先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし。

——即ち道といふものは國に依つて昌へるものである、道といふものは人に依つて貴いものである、若國亡び人が滅びて

に入つて居る、愚かな事には總ての人々が悪い教の網に引かゝつて、さうして誘法——即ち間違つた思想の網に捲つられて居る、さうして非常に迷つて、どつちへ行つて宜いか分らぬ、思想の混亂を生じて、燃え立つた地獄の焰の中に落ちて居る、洵に愁しい事である、苦しい事である、汝等早く信仰の間違つた心を説却して、最も正しいたつた一つといふ立派な道に歸れ、さうしたならば此の三界は佛の國となるのである、佛の國は衰へる筈がない、十方は悉く寶土となる、寶土は壞れる筈がない、國が衰へることなく、土が壞れることなければ、身は安全にして心は禪定ならん——實に何と申して宜しいか、千古の鐵案であります。今日の我國も亦正に此の状態に當つて居ると思ひます、當時蒙古の襲來があると云ひましたけれども、此の時はまだ蒙古の襲來から二十年も前に、日蓮聖人様が世の中の有様を見て、國難の必ず來るべきことを憂へられて、斯の如く警告なさつた。思想が間違つて居るといふと總ての事がおしまひである、思想を能く正して眞正の唯是れ一つといふ立派な思想に歸らなければ駄目である、それを能く間違へぬやうにするといふのが、正しきを立

て、國を安んずるといふ立正安國論であります。此の立正安國論は今言ひました通り、神武天皇御即位後第三十二回目の庚申の年にお書きになつた、それが丁度今年の西洋紀元の年数の千九百二十年に當つて居る所の日本紀元の千九百二十年である。妙な陰陽師のやうな事を申すやうであります。是は何かの暗合でありますか、同じく相似たやうな時勢に千九百二十年が當つて居るといふことは、非常に味ひがあるやうに思ひます。今年はいふやうな場合であります。此の秋に於て吾々はどういふ準備が必要であるか、どういふ風に準備しなければならぬであらうか、斯ういふ事が大なる一つの問題になるやうに思ひます。

「準備」といひますと、之を大きく言ひますれば、人間の一生萬事準備ならざるものはない。それは何の準備であるかといふと、「涅槃」といふ事に對する準備である。普通に「涅槃」といふと死ぬ事だと言ひます。吾々が年を取るなり病氣に罹るなりして死んでしまふ、それが涅槃である。佛様の御入滅になつたのも涅槃であると言ふ、それは其の通りであります。う、けれども涅槃といふものはそんな小さな意味のものでは

る、それが最後の涅槃である。即ち人間が生きて居る間に幾々と種ない事を取去つて善い事をする、さうして死ぬといふ時には、モウそれから後は善い事も種ない事も出来なくなるのでありますから、そこで涅槃といふものが一番重いものになつて居るのであります。詰り吾々が此の世の中に居る間の事といふものは、悉く皆無限の深らかなる命に入る爲めの準備であります。此の生きて居る間に善い事を重ねて、御奉公を十分に致しますれば、死んでから後の無限の生命といふものが輝くのであります。若し此の世の中に居る間に不準備であつたならば、さうして或は悪い事でもして居つたならば、それは總て無限の生命に曇りが生ずる譯であります。即ち無限の生命を穢す譯になります。であるから吾々は此の世に居つて、今眼を眠らんとする時までは、成功といふことは一つも言へない、一體此の世の中に成功しやうといふのは間違ひである、此の世の中は準備をするだけの事である。今茲に十億の財産を積んだ人があつて大いに成功したといつても、死ぬ前の日に如何なる事に依つて一文無しにならぬものでもない、さうしたならば大失敗を以つて死ぬことになる。である

ない、人間が生れて死んで行くのが涅槃であつて、其の外は涅槃でないといふものではない、涅槃といふのは要するに穢れを去るといふことである、私は梵語は能く知りませぬが、Zerubbabel といふさうであります。即ち棄穢——穢れを去るといふことである。其の點から考へて見ますと非常に面白い、例へば吾々が小學校に入つて「いろは」の「い」の字を覚える、それは一つの涅槃である、何故ならば今まで無明であつた——明かでない境遇から、明かな境遇に進んだのでありますから。それから小學校を卒業して中學校に進んで、今までの考の及ばなかつた事、今までの間違つた考を捨て、新らしく進歩する、それは涅槃であります。昨日まで分らなかつた事が今日分る、昨日まで悪いと知らなかつた事が、今日善い事を聞いて成ほど悪かつたと分つて自分の心を淨らかにする。頭の中の染つた事を拭ひ去る、それが涅槃であります。それで吾々の最後の涅槃は何處に在るかといへば、此の肉體から離れて死ぬ時であります。肉體と共にある色々の執着を去つて、何れにもさういふ執着の無い淨らかなる世界に入る、即ち限りある穢い生活を去つて、限りなき淨らかなる生活に入

から生きて居る間は決して成功といふものを望むべきものではない、立派な事をすべく準備すると云ふのが吾々の一生である。吾々の準備といふことは斯ういふ意味から見るのであつて、唯今年の準備とか、來年の準備とかいふことを深く考ふべきものではない。平素から準備覚悟の無い者が如何にして事に向つて進むことが出来ませうか、平素から覚悟が確乎として居つて、準備が十分に出来て居つて初めて立派な事が出来るのであります。此の世の中に生れます時にも、母の胎内に居ります間にも能く準備をした者は、健全なる子供となつて生れます。母の胎内に於て精神の働きを能く養ひ得た者は、胸口な子供になります。身體の方が十分準備出来た者は、身體の大丈夫な子供になつて生れます。吾々もこの限りある生命を終つて無限の生命に入ります迄に、精神的に立派な準備をしましたならば、精神的に立派な者になります。吾々の無限の生命には物質的の繼續はありませぬから、物質的の方はそれだけでありますけれども——尤も是も亦學問上から言ひますと、總ての物は不滅でありますから、何處かに行つて大いに働くに相違ありませぬが、不滅の精神といふものは千

年経つても萬年経つても少しも衰へずに働くのであります。それは、ケチな準備であつたならば、五六年経つたらば終ひでありませうけれども、立派な事を此の世の中にして、完全な準備を致しましたならば、其の人の生命といふものは無窮に輝くのであります。今日でも千年萬年——萬年は存しませぬが、何千年前のお方の立派な精神が、今日まで活動して居りまして、吾々に偉大なる影響を與へ、さうして人類の尊敬の的となり、渴仰の中心となつて居る人がある譯であります。それは皆生きて居る間の準備が良かったからであります。吾々は一ト度眼を睨つてしまふとモウ準備は出来ませぬ、斯うして生きて居る間にやつた事の其の輝きのみが残るので、モウ準備は出来ませぬ、であるから此の世の中に生きて居る中に成功するといふことを考へるより、先づ能く準備するといふことを考へるのが、真正の人間だと思ひます。

所で今日はどういふ有様であるか。是は今申した準備の意味より少し小さい部分的になります。併し唯だだびあい準備のみではいかぬ、其の時の準備如何、我が國民の今日の境遇に於ける準備如何といふことが最も大切である。何故なら

に吾々國民——吾々の同胞達がどういふ事をして居るかといふと、國家として必要な事は殆ど皆缺いて居る、國家として最も必要な事は、私は獨逸に於て最もそれを見るのであります。今日は亡びましたけれども、獨逸帝國といふものは立派なものであります。獨逸は立派な統一があつた、又獨逸國民の中の統一思想といふものは非常に盛んなものであつた、それから動蕩な國民であつた、秩序を重んじた國民であつた、服従心の盛んな國民であつた、これが獨逸の大を成した所以でありませう。所が目下日本國には残念ながらこれが一つも無い、第一極めて不統一の有様であります。さうして動蕩の様子も見えませぬ、失敬かも知れませぬけれども——ストライキを讀める譯ではありませぬが、怒つて一生懸命になつて、血眼になつてストライキをやるならば未だ知すべき點がある。併し、所謂サポタージュとかいふやうな事をやるに至つては、どういふ思想でありますか。サポタージュといふ事は悪い事でないかも知れませぬ、或る意味に於ては——自分の目的を達する爲めには手段を選ばぬといふことから言つたら善い事かも知れませぬけれども、男らしくない、イヤ女々しい、

ば此の準備が無くして、今日誤つて不準備にして間違つた考を起して、悪い結果を來したならば、是から後の準備に大なる汚點を留めるものである、さうして或は之を挽回することが出来なくなるかも知れませぬ。今申上げたやうな一生の準備といふことは、大きな意味でありますけれども、最も必要なものは足許の準備であります。足許の準備がフワフワして居つては、到底一生の準備は出来ませぬ。所で今少くとも日本國はどんな工合になつて居るかといふことを考へますと、言ふまでもなく戦争の後を承けて色々の影響を受けて居る、之を深く斯うだ、あゝだと云ひますと例の軍人の悲しさ、直ぐ、かしの事になるから申しませぬが、兎に角餘程危い時になつて居る。日蓮聖人をして今日にあらしめたならば、必ず大正の立正安國論を書かれるであらうと思ふ、當時蒙古襲來の大難の二十年前に、日蓮聖人が安國論をお書きになりましたが、今日の日本國の大難は二十年を待たずして來るだらう内外色々の方面から來るであらう、思想上に於ても勿論、産業上に於ても勿論、武力の上にも勿論、其の他總ての點に就きまして、大なる災難が來るだらうと思ひます。此の時

少くとも動蕩といふことを缺いて居る。此の間私が友達と一緒にバカ話をして居る時に、此の頃情けることをサボるといふが、サボるといふのにむの字を附けると能く當るな——と言つて笑ひましたが、成程ムサボるであります、そのムサボるといふ意味からサポタージュが起るのであります。何等動蕩の様子認められない、秩序も亦極めて立つて居らぬ、服従の精神などは日本國民は非常に強いものであつたのでありますけれども、是れ亦殆ど地を壞つたやうな有様である、服従などは卑屈だと思つて居る、ナニも卑屈ではない、服従すべくして服従する、是ほど立派な事はない、服従すべからざる所に服従する、これが男らしくないのであります。子が親に従つて親に服従する、何の男らしくない事がありますか、青くべき所の命令には絶対服従の意味を以つて掛らなければならぬ。吾々軍人なるが故に殊にさう思ひます、將軍が進軍の命令を下した場合に、絶対の服従を以て之に従はなかつたならばどうですか、「イヤ今こんな時に進軍しては困ります、明日まで待つて下さい」といふやうな事が若し始まつたならば、戦が出来ますか。總ての世の中はさうであります、此の

世の中を戦でないと考へるのは間違である、人間を殺すばかりが戦ではありませぬ、毎日々々戦をして居る、毎日毎日奮闘して居る、此の奮闘して居る時に命令を下すべき人から進めと言はれた時に、「明日まで待つて呉れ、自分は都合が悪いから」といふやうな事が始まつたならば、逆も何も出来るものではない、服従といふことは非常に必要な事である。秩序もさうであります、將軍が命を下します時に、其の下の方がそれを遵奉せずして將軍から下すべき命令がズツと下の方から出て来ると云ふやうな事があつてはならぬ、即ち日蓮聖人が殊に言はれましたやうに、朝廷から下すべき命令が一人の伊豆の國の土百姓の北條から出て来るから悪いのである、出るべき所でない所から出る、即ち秩序が紊れて居る、さういふ事は申すまでもなく非常に悪いことであります。所が今日日本では、服従の精神も大變に薄らぎ、秩序の觀念も乏しくなり、統一の精神も缺けて参り、勤勉努力といふ様子も見ることが出来ない、斯ういふやうな有様になつたならば、此の大難に向つて果して堪へ得るでありませうか、私は餘程心配なものだと思ひます。

今日世界の或る部分には、隠謀——と云つてはどうか知りませぬが、まあ隠謀であります——を企て、居る或る者がある、それは此の世の中を金の世の中にしやうとして儲きつゝある、さうして何百年——最早千年も前からさういふ計畫をして居る所の一つの民族がある、即ち國家の光よりも金の光の方を高くしなければならぬといふことを、ズツと世の中に普及しやうとして盡力して居る一つの魔がある。即ち「魔來り」と日蓮聖人が仰せられた魔は是でせう。其の魔が金力萬能を以て世界を風靡して、自分が金力を握つて世界を統一しやうといふやうな企てをして居る、其の企てが今將に盛んになりつゝあるといふことを一つ考へて見たならば、此の點などでも日本は安全でないといふことは想像されるだらう。日本が不安定なる状態といふものは——ツイ知らず諺らず深入りすると又危くなりますからモウ止めますが、要するに今後十年二十年待つたかたぬか知りませぬけれども、必ず日本國に大難が来る、さうして日本人の之に對する態度といふものが、河に頼もしくないとはいふ有様でありましたならばどうなりませうか、頗る憂心すべき事であります。(未完)



經 聖

永遠の妙教

本 多 日 生

羅漢ハ已ニ應真タリ、譬ヘバ人ノ居常貧ニシテ債ヲ負フモノ治生シテ利ヲ獲、歸ヘン畢ツテ歡喜スルガ如シ、復罪人アツテ久シク獄中ニ繋ガル、好キ長者有ツテ方便シテ出ヅルヲ得セシム、亦奴婢ノ免サレテ良民ト爲リ、及ビ病メルモノ連年ナリシニ醫藥シテ癒ユルヲ得タルガ如シ、又商人ノ遊難ノ道ヨリ重貨ヲ得テ歸リシガ如シ、此ノ五ツノ譬論ハ人皆歡喜ス而シテ我沙門モ亦猶此ノ若シ、自ラ念フ、生死ニ久シク繋ガレ五陰ニ更ニ苦ムコト無量ナリキ、今解脱スルヲ得タリト、何ヲカ五陰ト謂フ、一ニハ色、二ニハ痛、三ニハ想、四ニハ行、五ニハ識ナリ、此ノ五ツハ人ヲ覆フテ道ヲ見ザラシム。

(阿彌經、正大藏、第十四卷ノ式)

この一節は佛弟子の中に羅漢の悟を得た者の悦びを明し、

又人間の凡夫は五つの事に心を覆はれて正しき道を見ることの出来ない所以が示されて居るのであります。この經文に羅漢は應真たりと言ふてあるのは、羅漢といふのは梵語であります、譯して應真と言ひ、或は殺賊——煩惱の賊を殺すといふやうに翻譯されて居ります。應真といふことは眞理に合して眞實の悟を得て居るといふ意味である、如來のこともやはり應真と言ふので、羅漢といふ言葉は低い意味ではない、非常に尊い言葉である、後には佛といふ言葉を多く使ふが、やはり意味は同じ事である。その羅漢の悟に上つた人は、眞理に合した眞實の智慧を得て居る人であつて、其處には精神的悦びが現はれて來るのである。譬へを以てその悦びを比例して見ると、平生貧乏な



者が多くの負債を有つて居つた、それが商賈を顧んで利益を得て、その負債を返却し畢つて少しも借金の無い人になつた時の悦び、その悦びの心が悟を得た羅漢の悦びに比すること出来る。

それは事柄は違ふけれども生死の罪に於ての借金があつた者が、一切の罪を消し畢つて無罪の人となつた、解脱の人となつた、その悦びを味はふことが出来るのである。

又譬へば罪人が長く牢に繋がれて居つたのが、金持が色々助ける工夫をして呉れて、牢から出ることが出来た時の歡喜或は奴隸のやうになつて居つた者が良民となつて少しも壓迫を受けない、所謂自由の民となつた時の歡喜、又は永年痲痺して居つた者が全快して、健康なる身に復した時の歡喜、或は商人が困難な路から澤山の品物を持つて歸つて来た、その路を歩む時困難であつたけれども、自分の宅に歸つた時は非常な歡喜であるが如く、この五つの譬は世人が喜しいといふことを知つて居るが、丁度佛弟子が羅漢の悟を得た時の法悦もこれに比すべきものである、それは生死の迷に長く繋がれて居つた者がその牢獄から出ることが出来、或は五陰の苦し

が即ち五陰である。

今羅漢はこの五陰の迷ひを去つて、正しき精神的生活に入つたから、丁度牢獄に繋がれた者が赦されたと同じやうな歡喜に立つことが出来るのである、これも何も羅漢に限つたことではない、佛敎の信仰生活の意味は、總べて同じであるから、斯う言ふ趣意を味はずして、一概に小乘であるからと云ふ風に、古來貶斥して来た事は確かに間違つて居ると思ひます。

これは實際の人生の苦痛に居る者を濟度する永遠の妙教であり、宗教の生命であらうと思ふ。

### △遠江日蓮主義鑽仰會春季大會

大正七年秋より遠江一圓の日蓮主義者を中心として組織せられたる日蓮上人鑽仰會は會員今や數百名を有し熱烈なる信仰の力を以て極めて眞摯に同地方の思想善導に貢獻しつゝあり、然して其の第三回大講演會を櫻花綻び初めたる去る三月三十日より陸軍大將大迫尙道閣下を邀へて左記の通り各所に擧げられたり。

三月三十日午後七時 見付町警回座。同廿一日午前九時 同地專賣局。同廿一日午後一時 中泉町公會堂。三月廿一日午後七時 御前村小學校。四月一日午後一時 濱松市演武館

みに居つた者が、それを解脱することを得た。

五陰といふことは正しき考へを覆うて道を見ることの出来ないやうになつて居る意味である、「陰」といふ字は「覆ひ隠す」といふ意味である、もう一つの「蓋」の字を書いて五蓋といふ場合があるが、その蓋は物を裏んで居ると云ふことでその中に色々の事柄が含まれて居るから云ふのであるが、この陰の字の方は今言ふ通り覆うて見ざらしむる意味である。それは一つには「色」といふて身體があり、二つには「痛」と言ふて苦痛があり、三には「想」と言ふて様々なる妄想があり、四には「行」と言つて間違つた行ひがあり、五には「識」と言うて外界の事に依つて心を動かされる様な意識がある、心の光に依つて物を見れば宜いけれども、外界の爲めに動かされて居るから、それが爲めに非常に苦しみをするやうになる譯である。

世人は語り身體の爲めに、妄想の爲めに苦しんで居るのである、一つ心の靈光を磨いてそれが心を支配し行ひを支配するに至れば眞の法悦が得られるけれども、常に心の妄想と身體から来る慾望に動かされるが爲めに苦痛するのである、それ

各所共集集潮の如く押し寄せ來り滿堂立錫の餘地なく入場を謝絶するの盛況なりき、因に記す大迫閣下にはあの老體にも不拘ず、尙社者を凌ぐの意氣を以て、宇内の大勢より日本國の位置を詳かにし、我が皇室の御稜威の絶大なるを力説せられて、我が國民の自覺を促し、親近の思想問題の混濁に論及しては慷慨悲憤の深にけれ、滔々數萬言時の移るを知らず、結局吾人の信する偉大なる日蓮主義に依て此の國家を擁護し、人心を併和せざるべからずとの意味の講演にて、各所共多大の感動を興えたり、尙同會には閣下の外に小林一郎先生臨場の答の處速かに御病氣にて見合せとなりたるは等しく遺憾とする所なり。

### △西ノ宮日蓮主義同志會

四月五日午後七時より西ノ宮町武庫郡公會堂に於て日蓮主義講演會を開催す、當日は前日より晴天なれば相當聴衆者參集すべく見込なりしも何分雨後の事として道途溼惡甚敷殆んど足を没するの有様にて歩行困難を極め爲めに聴衆少なく漸くにして二百五十名ばかり參集するに至り依て開會を宜す時に七時五十分なり。

開會の辭 西村陽平氏(同志會幹事) 日蓮主義物與の好護連 三井三吾氏(御影日蓮主義青年) 所感 田邊謙治氏(御影日蓮主義青年幹事) 宣發大願 栗原辰男氏(御影日蓮主義青年會幹事) 思想の消化 澤富實一氏(西宮同志會幹事) 日蓮聖人の靈格 三崎廣氏(西ノ宮稅務署長日蓮主義研究會幹事) 或く皆已れに歸れ 熊井本光師



妙 判

# 當體蓮華に關する聖訓

本多 日生

問フ末法今ノ時誰人カ當體蓮華ヲ證得セルヤ、答フ當世ノ體

量ノ教主ノ金言ヲ信ジテ南無妙法蓮華經ト唱フルガ故ナリ。

(當體義抄、遺九百九十九頁)

「若シ人信ゼズシテ此經ヲ毀謗セバ則テ一切世間ノ佛種ヲ斷  
 ゼン乃至其人命終シテ阿鼻獄ニ入ラン」文、天台云ク「此經ハ  
 徧ク六道ノ佛種ヲ開ク若シ此經ヲ謗ゼバ義斷ニ當レリ」文、日  
 蓮云ク此經ハ是レ十界ノ佛種ニ通ズ若シ此經ヲ謗ゼバ義是レ  
 十界ノ佛種ヲ斷ズルニ當ル、是ノ人無間ニ於テ決定シテ墮在  
 ス何ゾ出ツル期ヲ得ンヤ、然ルニ日蓮ガ一門ハ正直ニ權教ノ  
 邪法邪師ノ邪義ヲ捨テ正直ニ正法正師ノ正義ヲ信ズル故ニ當  
 體蓮華ヲ證シテ常寂光ノ當體ノ妙理ヲ顯ハス事ハ、本門壽

これは末法に當體證得の人ありやと云ふ問題に關する聖訓で  
 ある。今現在その當體蓮華と云ふ覺り、自分の身體その微妙  
 法蓮華である、不思議な佛であるといふ當體蓮華の覺りを事  
 實に現はして行く人がありますかどうですかと云ふ問を擧げ  
 て來た。最初は十界の當體が皆妙法である、吾々の當體も妙  
 法であると云ふことになつて居るのですから、末法に當體蓮華  
 を證得する人ありやと言へば、無論ありと言はなければなら  
 ぬ譯であるが、愈々實際問題になつて來ると、日蓮聖人は中  
 々さう言はぬ、そこが當體義抄の眼のつけ所である、「南無妙  
 法蓮華經と言へば結構だ、お前もそれで當體蓮華だ」そんな

生涯のこととは日蓮聖人は言はぬ。それではどう答へたか、

問フ、末法今時誰人カ當體蓮華ヲ證得セルヤ、答フ、當世  
 ノ體ヲ見ルニ大阿鼻地獄ノ當體ヲ證得スル人コレ多シト  
 兼モ、佛ノ蓮華ヲ證得セル人コレ無シ。

新答へた、こゝが本當の日蓮主義である、之を除て何處に  
 日蓮主義があるか。それは人の中には佛性もある、十界具足  
 であるから、何にでも現はれて來る譯であるけれども、悲しい

事には今時に於ては大阿鼻地獄の當體、生きながら地獄に行  
 くべき當體がちやんと出來上つて、ボンと命が終ればその儘  
 地獄に墮ち込むと云ふ者は一パイ居るけれども、佛の當體蓮  
 華を證得して居る者は、先づ殆ど無いと言はれて居る。だから  
 この當體と云ふものは、佛の當體でなくして地獄の當體であ  
 る、この點が非常に大事なことで、自分に省みなければなら  
 ぬのである、「法華を信心して居れば、その儘佛ちや」などと  
 云ふ甘い言葉に騙されてはいけない、宗教と云ふものはそん  
 な甘い言葉で安心させて貰へば宜いと云ふものではない、甘  
 いのが宜いと云ふならば甘酒でも呑んで居れば之れで宜いの  
 ぢや、宗教と云ふものは實際に考へなければならん、自分に

も反省しなければならぬ、人からそんな甘やかしを言つて貰  
 つて、親鸞や法然が云ふやうに、惡人正機ぢや南無阿彌陀佛  
 々々々そんなとは駄目である、どうしても日蓮聖人が此處に  
 峻厳に言はれる通りに、眞實の信仰に生きて菩薩行に入つて、  
 眞實ある生活をして、どうしても俺の生涯は必ずや向上する  
 力があると云ふ、自己を顧みての確信に立たなければならん  
 のであります。

それを日蓮聖人が此處に教訓を垂れられたので、地獄の當  
 體を證得する人が多くて、佛の蓮華を證得する人が殆ど無い  
 と云ふ譯柄は、無得道の教の方に落込んで行つて、法華經の  
 眞實の教を守らないからである。詰り教に背くの咎に依りて  
 地獄に墮るのである、抑々法華經に背き法華經を毀り、法華  
 經に反對するといふことが、どれ程の罪かと云へば、法華經  
 の中にはさう云ふ人は蛇蝎命が終つたら地獄に行くと言ひて  
 あるが、その譯柄は法華經といふお経は如何なる者にも佛性  
 を開いて成佛をさせる程な立派なお経である、この妙法蓮華  
 經に依らずしては、菩薩も覺りを開くことが出來ず、二乘も  
 覺りを開くことが出來ない、現に提婆達多のやうな惡人も、

この經に依つて救はれ、龍女もこの經に依つて救はれ、惡人も女人も愚者も皆な悉く十界ともにこの法華經に依つて救はれることになつて居る、如何にも尊い妙法蓮華經である。その妙法蓮華經を讀み、その妙法蓮華經に反對すると云ふことは、自分に佛性があつて見た所が、佛性を現はす力の教に反對する罪に依りて地獄に墮ちて行くのである、天台大師は「法華經は六道の佛種を開く」と言はれて、地獄から畜生界までの佛種を開くと言はれたけれども日蓮は更に加へて「十界の佛種を開く」と説いて、菩薩もこの經に依つて救はれるのであるから……と云ふ事を述べられた、幸に日蓮の流を汲む者は正直に方便の教、邪なる法、邪なる師匠の邪なる義理と云ふものを捨て、正しき法、正しき師匠の正しき義理に依つて信仰をするが故に、佛の當體蓮華を證得することが出来るのである、當體蓮華を證得する事が出来る、出来ぬと云ふことは、自分が依る教に基くのである。其の正法、正師の正義といふことがなかつたならば、今日は當體蓮華を現はすことは出来ないのである。「正法」とは法華經である、「正師」とは法華經の意味を正しく傳へるものである、その正師が正

ふて、そんな事で満足するものではない。「日本乃至一國浮屠一同に他事をすて唯だ南無妙法蓮華經と唱ふべし」と日蓮は言ふて居るのである、今日の戦では十萬人や二十萬人を以て多いの少ないのと言つて居るべき時ではないのでありますそこでこの正法、正師の正義を信するが故に、當體蓮華を現はすのであるが、殊に注意をせられたのは唯だ正法、正師の正義と言つても、一寸抽象的の言葉でよく分らんから、更に根を打つて斯う言はれた。

本門壽量ノ教主ノ金言ヲ信ジテ、南無妙法蓮華經ト唱フルガ故ナリ

その正法、正師の正義と云ふ意義は、徹底的に考へれば、本門壽量の教主の金言——本門壽量品に現はれて居る所の本佛即ち教主の説かれた金言を信じて南無蓮華經と唱ふる者でなければならぬ。この「本門壽量の教主の金言」といふ事を忘れてしまつて、唯だ南無妙法蓮華經を唱ふると言つても駄目ナンである。それが唯だ唱ふるところではない、壽量品の教主を侮りこれに反對して南無妙法蓮華經と唱ふるが如き者に至つては、幾ら朝から晩まで南無妙法蓮華經と唱へ詰めに

しき義を主張する所に従つて行かなければならない、正法正師の正義、といふことが大事である、少しでも四はれたやうなもの駄目ぢや、一點も謬りなく法華經の眞精神を傳へると云ふ事を考へて居る人でなければ、下らない所に引つかつて、法華經といふものをダシに使つて、己れの下らん考へを混せて法を汚かして居るやうな者の言ふことは、何の値打もない、この法華經を眞直ぐに奉獻して、法華經の正義を主張する者でなくてはならぬ。ドンドコ法華のやうなもの唯だ賑やかしにはなりませんやうけれども、何の値打もない、日蓮聖人に對して洵に申し譯のないことである。日蓮主義の主張が、さう云ふ低級なものであるならば止むないけれども、日蓮主義は唯今申す通りに、如何に理智の發達したる文明の代にも最後を演度しやうと云ふ事を理想として居るものである。一時多數を制して滅び行く淨土門の如く、天理教の如く、一時の榮えは夢か幻か、バツと消えると云ふやうなものは取らぬ。末法萬年最後の文明まで、横には世界を通じて一天四海にこの法華經の理想を布かんとするものである、十萬人や二十萬人の人間か池上に行つたから、お會式が賑やかだと云

しても、この壽量品の教主に刀向ふならば、眞ッ邊様に地獄に墮ちてしまふ。幾ら口に忠義々々と言つた所が、事實、天皇陛下に對して不忠の行ひをすれば、夜通し言つて見た所が何に成るか。口にばかり言うたら宜いと云ふ都合はない。人間は第一心である、心に念すると云ふことは、この絕對無上の本佛を念する事である。「日蓮主義は唯だ南無妙法蓮華經と唱へる宗旨ぢや」と云ふやうな事を言ふが、そんな口で唯だ「ナンメウ、コリヤ〜」といふやうな事ばかり言つて、それが何になるか。唱へるのは唯だ修行の存續に就て言ふので根本は信念成佛である。心に信する、その一念の信仰意識が大事である。それは何を考へたら然るが如き信仰意識に現はれるかと云へば、本佛の大慈大悲に感孚するところでありませう。

### 各地の法華經要文講義

- △四月一日 京都妙満寺、聽衆二百五十人 △四月五日 名古屋常徳寺 (臺南) 聽衆四百人 △同六月 同上、聽衆七百五十人 △七日 四日市圖書館 聽衆三百人 △同十六日 大阪市醫師會事務所、聽衆三百名 △同十七日 同上、聽衆三百名 △廿二日 神戸市カフエーオリエン



教義 日蓮聖人教義綱要 (第三十五)

井村 日 咸

第八章 修行

第八節 六根の懺悔

以上は用道の化他的活動の方面をお新致したのであるが、すでに他の爲に法を説き教義を宣傳する以上は、自己が其模範と法り先達と爲るの覺悟がなくてはならぬ。それには内省的方面を逸却してはならぬ。若しも其内省的方面を逸却して自己の行儀を匡正せず、本能の欲する儘に自墮落の行法を爲すならば、佛の教を信するものと許すことは出来ぬ。現今の佛教徒の中には其教義の力の強大なるを信するの結果として自己は如何なる罪惡を犯しても差支ない、教の力能く之を救ふに足ると信じて自己の行者を反省せざるものがあるが、

此は大乗詩と稱して一種の増上慢の徒である。純正なる信仰者は此に習ふてはならない。眞に人身觀と發心との下にてお察せし如く、我々の信仰は現在生活に就ての自覺に其起原を發して居るのである、自覺なき信仰は其意味を爲さない、自己の日常の行爲に就て反省せざるものは未だ人生に對する自覺を有せざるものである、如何なる宗教と雖ども必ず人生の自覺を要求して居る、基督敎には「悔ひ改めよ」と説き、佛敎には六根懺悔の法を説いて盛んに内省的方面の活動を促して居る、六根懺悔の言葉は今富士講一派の専有物の如くに思惟せられて居るが、佛敎一般に通じて信奉せざるべからざる信条であるのである。法華經の結經たる觀音經は法華經を滅後に信奉すべきの

が法をお示しに成つたお經であるが、此經の中には我々の信仰の成就は専ら六根懺悔の法にあることを教へられた、我々の信仰の成就とは實在の本佛に見參することである、自我偏の中には一心欲見佛不自惜身命自我及衆生俱出靈鷲山とあるが、吾人の信仰が其極致に達するときは、本佛は其尊容を吾人の前に示現せらるゝのである、天台大師は法華三昧成就の時に靈山一會儼然未散の尊容を拜し、日蓮聖人は龍の口法難の時に其尊容を拜し給ふたと傳へられてある、吾人と雖ども、其信仰が極致に達すれば本佛の尊容に接し得ることが出来るのであるが、不幸にして罪業深重の爲めに容易に其目的を達することが出来ない、信仰の力薄弱なる爲め、罪障重き爲めである、觀音經には先づ始めに此經を信するもの、

と説いた、是觀とは普賢觀である、六根の罪惡を發露懺悔し、大乘經典を讀誦するの功力に依て本佛の依報(國土)正法(佛身)を觀見するを云ふのである、次に是觀の功徳を擧げて、此觀の功徳は、諸の障礙を除いて上妙の色を見る。(同 上)と説いた、上妙の色とは佛身の微妙莊嚴なると佛國土の嚴淨なるを云ふたのである、此は信仰の功徳即ち功果は佛身と佛國土を實見するにありと説かれたのである、而して此功徳を得るには幾何の時間を要するやと云ふに就いては但誦持するが故に心を専らにして修習し、心々相次で大乘を觀れざること、一日より三七日に至り普賢を見奉ることを得、重き障ある者は七七日の後然して見ることを得、復重きこと有る者は一生に見ることを得、復重きこと有る者は二生に見ることを得、復重きこと有る者は三生に見ることを得、是の如く種々に業報同じからず、是故に異説す、(同 上)と説く、罪障の極く輕きものは一日乃至三七日の間に普賢菩薩の色身を見ることは出来る、普賢菩薩を見るは極最初て是

(縮法四七七)

(同 上)

から順次に分身の佛を見、多寶佛塔を見、釋迦牟尼佛を見上る様に進んで行くのであるから、先づ極樂の門の前に通り着いた處である、罪障の極重いものは、三返生れ變つて始めて行ける、要するに自己の罪障の厚薄に依つて差別するのである、近頃法華宗の寺院でお消滅とか唱へて一返か二返の御祈禱で罪障を一切消滅させるなんて言ふて居るものがあるそうだが、吾人の罪障はそんな手軽なことで消滅する様なものではない、若しほんとうに罪障か消滅したならば極樂の境界が見える筈だが、何返御祈禱して貰つても一向見えぬ、未だ罪障消滅して居らぬ證據である、心々相次で大乘を離れずして尙一生二生三生迄も要すると云ふのは、一返や二返の御祈禱で消滅する譯のものぢやない、だまされてはいかぬ、御祈禱料が損になる、生臭坊主の肥料になる丈のものである、注意すべきである、經に更に罪障消滅の方法を説いて、

- 一、禮佛 遍く十方無量の諸佛多寶佛塔釋迦牟尼佛并に諸菩薩を禮拜す
- 二、誦經 大乘方等經典(法華經)を讀誦し奉る。
- 三、懺悔 六根の罪惡を發露懺悔す

て洗滌して我をして 清淨ならしめ給へ(雜法四九三)と發願し遍く十方の佛を誦し釋迦牟尼佛大乘經典に向ひ奉つて更に左の如く言上す、

我今懺する所の眼根の重罪障欲穢濁にして首にして見る所なし、願くば佛大慈を以て哀愍覆護し給へ、唯、此を眼根の罪を懺悔する法と名づく (雜法四九四)

と、眼根に映する處に惑著を生じ罪咎を發す、此が爲めに心眼を致はれて首ざるゝのであるから、今此罪惡を悔改めて、諸佛菩薩の慈悲の御手に縋り其惑著を洗滌せんとするものこれを眼根懺悔の法と云ふのである、次に耳根懺悔の法を説く、始めに普賢菩薩行者の爲めに説く、

汝多劫の中に於て耳根の因縁を以て、外の聲に隨逐して妙なる音を聞く時は心に惑著を生じ、惡き聲を聞く時は百八種の煩惱の賊害を起す、此の如き惡耳の報惡事を得、恒に惡聲を聞て、諸の樂縁を生ず、顛倒して聽くが故に當に惡道邊地邪見にして法を聞かざる處に墮すべし、汝今日に於て大乘の功德海藏を誦持す、是の因縁を以ての故に十方の佛を見上り多寶佛塔は現じて汝が證と爲り給ふ、汝自ら當

の三方法を説いてある、諸佛誦經は本尊を安置し唱題修行の信仰の形式と爲つて顯はれたのであるが、第三の懺悔の行が即ち内省的方面の實際行爲である、此懺悔があつて始めて、吾人の日常行爲に善美德を發揮し來り、實生活の上に善良なる影響を發現し來るのであるから、茲に信仰の美果を收め得るのである、經には委細に六根懺悔の方法を説いてある、六根懺悔の事は眞に懺悔發心の下の申上げてあります、更に委しくお祈致して見やうと思ふのであります、

汝今應に諸佛の前に於て先罪を發露し至誠に懺悔すべし、無量世に於て眼根の因縁を以て諸色に貪著す、色に著するを以ての故に諸塵を貪愛す、塵を愛するを以ての故に女人の身を受けて、世々に生ずる處諸色に惑著す、色汝が眼を境つて恩愛の奴と爲る、故に色汝を使ひ三界を經歷せしむ、此弊使の爲に首にして見る所無し、今大乘方等經典を誦す、此經の中に十方の諸佛色身滅せずと説く、汝今見ることを得つ眞實にして爾りや否や、眼根不善汝を傷害すること多し、我語に隨順して諸佛釋迦牟尼佛に向ひ奉り汝が眼根の所在の罪咎を説け、諸佛菩薩の慧眼法水願くは以

に己が過惡を説いて諸罪を懺悔すべし、(雜法四九七)行者普賢菩薩の語を聞き已つて、合掌し佛を誦し五體を地に投じて左の言を爲す、

正遍智世尊現じて我證と爲り給へ、方等經典はこれ慈悲の主なり、唯願くは我を見、我所説を聽し給へ、我多劫より乃至今身に至るまで、耳根の因縁を以て聲を聞いて惑著すること膠の章に著くが如し、諸の惡聲を聞く時は煩惱の毒を起し、處々に惑著して暫くも停る時無し、此弊聲を出して我諷神を勞し三塗に墮墮せしむ、今始めて覺知して諸の世尊に向ひ奉つて發露懺悔す (雜法四九七)

次に鼻根の懺悔を説く、

先世無量劫の中に於て香を貪るを以ての故に分別諸識處々に貪著して生死に墮落せり、乃至此の如き惡業を今日發露し、諸佛正法の王に向ひ奉つて發露懺悔す(雜法四九九)

舌根の懺悔は

此舌根は惡業の想に動ぜられて妄言綺語惡口兩舌誹謗妄語邪見の語を讀歎し無益の語を説く、是の如く衆多の諸の雜惡業隨逐壞亂し法を非法と説く、是の如き衆多の罪を今悉く

懺悔す、此舌の過患無量無邊なり、諸の惡業の輪は舌根より出づ、正法輪を斷すること此舌より起る、此の如き惡舌は功德の種を斷す、非義の中て於て多端に強て説き邪見を誹謗すること火に薪を益すが如く、猛火の衆生を傷害するが如く、毒を飲めるもの、疥癩無くして死するが如し、是の如き罪報惡邪不善にして惡道に墮すること百劫千劫なるべし、妄語を以ての故に地獄に墮す。我今南方の諸佛に向つて過罪を發露せん

(縮法五〇〇)

と説いた、次に身心二根の懺悔法を説かれた、身には殺盜淫、心には、諸の不善を念ひ、十惡業及五無間を造ること、猶瘡癩の如く、本體の如く、處々に食著して遍く一切の六情根の中に至る、此六根の業枝條華葉悉く三界二十五有一切の生處に滿てり、亦能く無明老死十二の苦事を増長す、八邪八難中に經ざること無し、今當に是の如き不善業を懺悔べし

(縮法五〇二)

と、以上六根の一々に就て懺悔の法を説かれたのであるが、更に其根本の罪惡を擲出して、

より起る、乃至是の如く懺悔すれば心を觀するに心無し、法々の中に住せず諸法は覺脱なり寂靜なり寂靜なり、是の如き相は懺悔と名く、大莊嚴懺悔と名け無罪相懺悔と名く。

と説かれた、罪惡の根本は顛倒の見即ち妄想より起り來るものである、故に顛倒の見を破り妄想と打拂ふならば光明ある生活は其中より生じ來るものである、此は佛陀の御教に隨順して自己の身心を清淨ならしむべく懺悔するより外に途は無いのである。故に經には

一切の業障海は皆妄想より生ず、若懺悔せんと欲せば端坐して實想を思へ、衆罪は霜露の如し慧日能く消除す、是故に至心に六情根を懺悔すべし

(縮法五〇七)

と、我等は過去遠々の過罪を發露懺悔するのみならず、現在の生活に於いても、六情根の本能の儘に委することは、過罪を益々重ねる所以なれば、適宜に之を抑制し過患無からしむる様努力して行かねばならぬ、不斷の努力を以つて反省改悔して行くならば吾人の身心は任運に光明裡の生活に發展し行くことが出来るのみならず、世を益し人を利するの他化益を成辨し得るのであります。



到 得 還 來 錄

山 内 櫻 溪

見出しの到得還來とは、予が久振りにて僧門に復歸したるを意味するなり、予や癡に日清戰役後、仔細ありて從軍裝裝を宗廟に返還し、門を出て、操紙界に逍遙すること廿有餘年隨分長き逍遙なりしかども、乍去、予に取りては猶如平日なり、成程、五十小劫とても同じ事ならんか、兎まれ熟睡一覺の刻下、襟懷爽然たると同時に、心地透明珠の如く、現世界三千の諸相は、悉く予が一念裡に映じ來り映じ去り、其刺戟の痛痒なる食も旨からず寢て寢られず、感慨の極、中宵屢々念を斷て起つに至る。

芙蓉不出奈時難、

「群小揚々汚教壇、

北斗蒼々照我寒」

五年に亘りし娑婆界未曾有の大戦亂は、其因に於ても、緣に於ても、終た其果に於ても、乃至其報に於ても、凡々たる

人間力の致したる無意味の業としも思はれず、其大々の有意味の眞消息に至りては、實に是れ唯佛與佛、乃能究盡の境涯に屬する沙汰なるべし、乾坤一擲の大洗濯、有史以來好めての大分歧、凡ての悲も凡ての惨も通り越したり、生死長夜の夢も覺めたり、之をしも悲慘を通り越したりと云はず、長夜の夢覺めずと云ふ者あらば、身首處を異にしても三度の食事は出來得る者と首想せる海兒ならんのみ、而も社會の有らゆる組織は、悉く改造せざるべからずとて、猶も杓子も、之を叫び、之を唱ふるのみか、之を促がし、之を企て、此の欲望の前には、善惡是非の批判を無視して省みるところあらず、歐洲に於ては勿論、米國に於ても勿論餘勢延て亞細亞に及び、之が爲め、我日本帝國の四面は、業に已に楚歌の觀を聽くのみならず、時潮流れて我思想界の隙間を侵し、帝國の現狀は宛

として百尺懸崖に孤立するの危険を示すに至りぬ、左なきだに政治は國家本位ならず、國民本位ならず、政黨本位政黨本位より割出して打算せられ、實業も、文教も甚だしきは國防までが、一切政策の犠牲に供せらるゝ程の我國に在りて、世界の大勢に襲はれ、壞されざるもの果して何物か有るべき、果然勞働問題は、普選問題と相呼應して耳目を聳動せしめぬ、又斯くあらしめんとて無智の民衆を煽動し、之を奇貨として陋劣なる野望や政權欲を逞ふせんと焦り立つ者現はるゝに至りぬ。洛々たる是等の連中には、思想が如何に險惡に陥ろうが、國礎が搖ぎ出そうが、左る事には寸毫の懸念を拂ふ眞摯の誠意忠情なく、さながら是れ興行の木戸番叫びと一般、お客さへ多く這入りて儲けだに多ければ北叟笑むの外なきのみ、露國彼が如く、西伯利亞の暴狀彼が如く、支那の無統一彼が如く、鮮民の不逞彼が如く、而も之に煽動的油を澆ぐ歐米險の勢ひ燎原の火の如きものあるに至りては、極東の日本たるもの正しく二重三重の困難に包圍されたるものと謂はざるべからず、物質界よりも、思想界よりも、將た國防上よりも……顧みれば六百五十餘年前、日蓮大士が蒙古襲來に先だ

間の大戦亂が米國に寄與する所絶大なるものありしだけ、それだけ太平洋に加はる米國の勢力が偉大なるものあるは、眞に想像に餘りあり、加之、多々益々太平洋に加はる米國の勢力は、延て南洋に、濠洲に、將た亞細亞沿海洲に波及し、殆んど世界の東西南北を撃つる概あるを見るべきなり。

而も排日氣焔は、今しも渾圓球上に滿り、此排日の目的、排日の思想を我識者は抑も何とか觀る、此は今の設け關連で解決の若くべきものに非ず、何となれば其根本出發點が、形而下の作用に非ずして、實は全く形而上の思想關係に外ならざればなり、人種平等案が物に成らざるは知れ切つた事、法華經法師功德品に説れし如く、三千大千界に於ける、内外諸の音聲は悉く能く分別知し得らる、禽獸呼應の聲の意すら判別するに難からず、況んや人間が嗔やく音聲の意味に於てをや、特に況んや太平洋の波動が傳へ來れる天警刺戟に於てをや、恐日も、嫉日も、排日も、其意、其欲、彰々として我掌中を見るが如けん。

嗟呼帝國の四周は斯の如し、我は倍々困難に包圍せられつゝあるなり、祖語を假りて露骨に言はんか他國侵逼舞の來る

ちて、風前の燈火に等しき帝國の危急を、辛くも安國論の血著もて支へられたる當年の現状と、大正今日の困難包圍とは眞に髣髴たるものなり。

「夫れ國は法に依て昌へ、法は人に依て貴し、國亡び人滅せば、佛を誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや、先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし」

との祖訓、源として光彩を放ち、六百春秋猶ほ昨日の如き感あるのみならず、今日正しく元寇來に先だつ危機と毫も異なるところあらず。

謂ふる十九世紀の文明を河川文明なりとせば、廿世紀の文明は海洋文明なること東西識者の異議なきところ、而して戦後の疑問は、陸に在りて亞細亞大陸の解決と、海に在りて太平洋の解決に外ならざること、亦一般識者の注目するところなり、而も大陸の解決が、太平洋を透してに非ずんば、確定のものに非ざるを知らば、今後世界の分岐點は、一は太平洋の覇權掌握者に依りて決せらるゝものと謂はざるべからず、太平洋の東岸に虎視眈々たるものは米國たり、我日本は其西岸に鷹を負ひ、背面大陸を控へて正面太平洋に臨む、既往五年

こと遼らじ、外既に斯の如くなるに加へて、内國民の思想たる動搖紛亂適歸する所を知らざること、さながら洋上に漂へる孤舟の如く、斯くては我國國體に動搖を來すの憂懼なからずとせず、心外の敵はマダしも、心内の賊に至りては、悚然として身の毛の豎立ものなくんばあらず、若し日蓮大士を今日地下より、否々靈山より喚起し來らば如何、何條やはか默せらるべき、大正現代に應ずる立正安國論は、太陽が波を破つて出づるが如く、獅子が乾坤を吼り崩すが如く、毅然として世界の極東より現はるべし、叫ばるべし、如日月光明能除諸幽冥なるべきや知るべきのみ。

「想入滄溟出宇宙、氣包六合覆乾坤、

虎狼在市親於大、子々乘機駕巨鯢、

龜有毛兮兎有角、不須群小是非論、

壯心落々三千界、喚起英雄未死魂」

予や何の幸ぞ、日本國民に生れて聖明陛下の赤子たると同時に、末法唯一の大導師たる日蓮大士が信念の光輝に觸るゝを得たり、其有髮たり、無髮たるが如き些事は問はず、須らく諸事を抛ち斯の國家の危機、世界の閻濁に向て祖意の萬

一たりとも、敢然起て宣傳する所なかるべからず、「我れ世界の柱とならん、我れ世界の眼目とならん、我れ世界の大柱とならん」と誓ひ願つて祖意を擴張して、報恩の微衷認めらるゝを得んか、但だ不肖庸劣の材、適器に非ざるを知らば、須らく嗣法の偉材を物色して随喜貢獻の赤誠を發揮して可なり。

本多現管長は我同志中の英雄なり、奮闘予感慨を本多師に語る、眉宇動て快諾の榮に接す、即ち到得還來を公にする所以なり、斯くて大垣の塵を出づるに臨み、左の一律を壁に題し岐阜縣百萬の知友に告別し畢んぬ。

『老驥思千里、  
天爲散百花、  
夜來大地動、  
應起殉邦家、  
垣廓梁山泊、  
濃州大白車、  
狼烟揚此處、  
猛進斬長蛇』

### 記事

## 自慶會名古屋支部創立大會

昨臘創立以來僅かに兩三ヶ月にして急速の大發展をなした

氏に依りて自慶會趣意書は朗讀せらる、四、愛知縣小幡内務部長の床次内務大臣の祝辭代讀、五、高橋檢事長の平沼檢事總長の祝辭代讀、六、宮尾愛知縣知事の祝辭代讀、七、佐藤名古屋市長の祝辭朗讀是れにて式は了り會歌、國の實の演奏あり。床次内務大臣以下の祝辭は左の如し

自慶會議ニ朝野ノ名士ニ依リテ創立セラレテ以來、一般勞働者ニ對シテ慰安ヲ與フルト共ニ、穩健着實ノ風ヲ興メ自慶滿足ノ生活ニ立タシメン爲メ力ヲ效スモノ茲ニ年アリ、今回名古屋支部ヲ創立シテ益々其事業ヲ進ムルニ至リタルハ洵ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ、願フニ方今ノ時勢勞働者ノ向上ヲ促スノ要務ニ切ナルモノアリ、希クハ自今尙一層ノ努力ヲ以テ一段ノ好績ヲ擧ゲ以テ社會奉仕ノ爲メニ竭サレムコトヲ、聊望スル所ヲ述テ祝辭ニ代フ

大正九年四月二日 内務大臣 床次竹二郎

方今國家凡百の事業急設を要するもの頗る多からん、就中國民の意志を鞏固にし其れをして動搖せず、安分知足以て健全に發達せしむるが如きは蓋し亦最も急なるもの一ならん、惟ふに下たるものは忠實上に奉じ上たるものは慈祥下を受し、富める者は財を投じて業を起し貧しき者は力を吝まらず樂に服し、上下相親しみ貧富相輔け協力同心一大家族の體をなして和樂熙々、而して敦厚淳朴の情自から其間に存するもの之を我國の美風となす、我國民たるものは此美風

る自慶會名古屋支部は、既に同地方に於ける官民有力者の殆ど全部と、及び大工場の過半数とを賛成せしめ、及び財團法人に組織を變更すべく基金の寄附を受けたるを以て、四月二日午後七時より支部創立大會を兼て思想問題大講演會を名古屋國技館に開催する事となれり、此數日來は雨脚絶間なく宛然梅雨中に髣髴たる天候なるにも關はらず、定刻前より聴衆同館に押寄せ開會の際無慮六千餘人と註せらる、若し同日晴天ならんには無論一萬人を超過したるならん、斯の如き盛會は同館未曾有の事にて、一、如何に自慶會の趣旨が社會公衆の歡迎する所となりつゝあるかと云ふ事、二、講師の顔振れが社會渴仰の中心となれる事、三、主催者及び幹業者の盡力が十分に行届ける事の三者を認むるを得べし、午後七時開會先づ式を擧ぐ、一、陸軍少將丹羽剛氏開會を宣言したるが音吐明瞭にして權威を含み簡單の一言滿場の聴衆をして覺へず敬虔の意を發せしめ且つ神氣爽然たらしむ、二、國歌、君が代の奏樂あり、舞臺一面櫻花燦爛たる裝飾に加ふるに萬國旗を照らす無數の電燈は左しも況き國技館をして白晝の如からしめ滿場の快感一同の眉宇に閃めく、三、理事長森越太郎

を永遠に存し、上下實富の協同を長久に保ち、以て國運の隆盛を觀望せざるべからず、是れ寔に方今の急務なりとす、若し不幸にして之に反する時は、恐らくは延て國家の安寧を妨げ秩序を失ふに至らんか是れ謂ゆる雷を履みて堅氷至ると謂ふべきもの、豈寧心せざるべけんや

謹此に見る所ありて蓋し自慶會を創立せられ、今日更らに名古屋支部發會式を舉行せらるゝの佳運に會す、希くは本支聯絡を鞏固にし銳意事に當り、將來皆々會務を擴張し、上下扞拏貧富乖離の憂なからしめ、長へに國家の安寧を保持せられんことを、聊無辭を陳て祝辭とす

大正九年四月二日 大審院檢事總長 平沼騏一郎  
法學博士

今次自慶會支部創立せらるゝに方り一言祝辭を陳るは予の光榮とする所なり

近時我國運の發展頗る顯著なるものありと雖も、世界大勢の變化に伴ふ思想界並に經濟界の動搖は識者の常に憂慮措く能はざる所とす、殊に産業の發展は勞働問題を誘發し、今や最も重大なる社會問題となり、之が解決は僉眉の急務たるに至れり、惟ふに我帝國の國是は上下同心協力以て邦家の爲め相協すにあり、然るに現時思想界の動搖と經濟界の變化とは動もすれば、國體の光を示さんとす、各位愛に憂ふる所あり勞働者の慰安と善導とを目的とし自慶會を設立し、本日を以て名古屋支部を創立せらるゝ、誠に慶賀の至りに堪へ



す希くは奮勵努力以て國民教化の實を擧られむことを

大正九年四月二日

愛知縣知事 宮尾 舜治

茲に本日を下して自慶會名古屋支部發會の式を舉行せらるゝに當り一言祝辭を送るは余の最も欣幸とする所なり

惟ふに歐洲大戰は世界人類に對して國民思想及び産業組織上に重大なる二箇の案件を残して去れり、一は民本思想の問題にして他は勞資協調の問題なり、然り而して兩者は相互關聯國民生活の経緯をなし、一方を擧れば他方を引くの密接なる關係を有するを以て本案解決の要は先づ生活の根柢たる産業組織を改善して國富の増進を計ると共に勞働者各箇の生活を保障し、更らに精神生活の理想を實現して社會全局の享樂と幸福とを増進するに在り、我自慶會は夙く茲に見る所あり、産業組織の骨子たる勞働者を慰安し且つ之を善導せんが爲め清新なる娛樂の中に慰藉と向上とを期し、復た講話に因て健全なる思想を涵養し以て個人の徳性を發達せんとせらるゝ、尙に時勢の要求に適切なるものと謂ふべし、宜なり本會の創立以來未だ三年ならざるに其主張全國に普及し、今や本市亦た支部を置るゝの盛況を呈せり、國家の爲め慶賀に堪ざる所なり、希くは會員諸氏今後一層努力會旨の宣傳を計り以て崇高なる所期の目的を達成せられんことを

大正九年四月二日

名古屋市長 佐藤 幸三郎

斯くて左の順序に依り講演は開催せられぬ

○時半日本車輛職衆一千人「無思の觀念」本多日生、○八日午後一時豊田織布職衆男工百名「四月八日を記念せよ」山内櫻溪「健全思想とは何ぞ」本多日生、午後一時半豊田織布職衆女工三百人「女工の心得」山内櫻溪「喜びの心」本多日生、○八日午後三時豊田紡績職衆男工二百名「道心と感激性」山内櫻溪「日本の道徳」本多日生、○九日午後一時菊井紡績七百名「舉國勞働」山内櫻溪「三つの心得」本多日生、○同日午後四時帝國操縦機千五百名「人は心掛け」本多日生、○十日午後七時、大阪伊藤萬商店、店員百餘名「修養の大綱」本多大僧正、○十六日午後一時半、大阪安治川職工所、職工六百餘名「思想問題の正路」本多大僧正、○十八日午後四時、大阪住友鑛所、職工千三百名「思想問題に就て」本多大僧正、○二十日午後七時、明石公會堂、千名「開會の辭」三輪明石市長「三大自覚」本多大僧正、○廿二日午後五時、神戸内田汽船會社、社長以下店員一同「思想問題私見」本多現下、○廿三日午前十時、神戸武徳殿、市内各警察署員「思想と修養」本多現下、○同日午後四時、鐵道院置取工場、職工二千餘名「精神修養と傳教」本多現下、○廿四日午後一時、鐵紡兵庫工場男工及社員「思想の戦」本多現下。

### 三月中の巡回教化

三月に於ける我『うごくてら』の野戦は愈二十二日橋場を初日に開始さる。吾等同人、或は人足となり、或は講師となつて大車輪、未だ準備も十分調はざる中より、少年達は潮の

思想問題善導に關する所見

海軍中將 佐藤鐵太郎氏

自慶會に就て 海軍造船中將 福田馬之助氏

思想の悪化善化 大僧正 本多日生師

國民の覺悟 陸軍大將 大迫 尙道氏

此夜各講師の演説振りは何れも満點の光彩を放ち拍手の聲絶へず急激の到るが如く響に堂を動かしたるのみならず六千の聴衆に多大の感動を興へ深き印象を刻せしめたり、他日思想變遷史を綴るものあらば當夜の講演は最も意義ある頁を飾るの價値あるを疑はず、十時半閉會を告げ各講師并に聴衆一同起立して天皇陛下の萬歳を三唱す餘音爛々として金城の鏡鉢落來らんかと思はる(櫻溪記)

○自慶會支部月報 四月四日午後四時名古屋當徳寺、職衆鈴木グワイオラン職工一千人「同胞の意義」山内櫻溪「幸福の道」本多日生  
○同日午後七時當徳寺職衆松村陶器職工二百五十名「信佛的自覺」山内櫻溪「文明の愛護と大成」本多日生、○五日午後一時名古屋電報職衆二百人「正しき理解と信念」本多日生、○五日午後三時半山岸製材職衆五百人「照顧脚下」山内櫻溪「佛敎の大要」本多日生、○六日午前十時半愛知時計職衆一千人「人類文明の基礎」本多日生、○七日午後

如く押し寄す。開會近づくと、崩雪を打つて入らんとしたる爲、倒れる者もあり、泣き叫ぶ者もある。スハ事ぞと力を合せ漸やくそれを堰止めて事なくすむ。

開會を宣言するや、彼等は入場時に於ける騒がしさに引替へ深として水を打つたる如く靜肅に最後まで謹聴せり、終りに真心こもれる聲にて天幕も割れん許りに萬歳を三唱し散會せり。

午後六時より降雨、前回には雪に鎖され今度は雨に降られ、吾等同人の苦心は實に慘澹たる有様なりしが、益々勇を鼓して突進す巡回教化は雨天中止の廣告をなせしかば、純日蓮主義宣傳講演とせり。雨は篠突く程降つたれど、來會者は満員の盛況。

○三月廿二日曇後雨、地方橋場に於て、畫小供會四百五十名、夜講演會、三百名、講師高木日晴、川島松雄、關田日城、餘興、統一節、琵琶、○三月廿三日同所に於て、畫小供會三百五十名、夜大人會三百名、講師、高木日晴、野口日主、餘興統一節、講演。

○三月廿六日、日暮里體育會に於て、夜大人會二百名、講師、高木日晴、本田仙太郎、野澤少將、本多現下、餘興統一節、講演。此日中止の豫定なりしに、突然動員令下り、爲に準備行き届かず。

小供會は中止す。夜の會も聴衆二百餘名に過ぎず、總裁陛下御親政の折柄遺憾に堪へざりき。

三月廿七日同所に於て、豊小供會二百名、夜大人會百五十名、講師、高木日晴、妹尾義郎、野口日主、餘興、統一節、浪花節。

### 『うごくてら』の釋尊降誕會

四月中の巡回教化は全部釋尊降誕會に集中されたる感ありし程、吾等同人の活動は目覚ましかりき。然し今日も雨、明日も雨と降り込められて、吾等の落膽は云ふも更なり、腕節拱いて無聊に苦しめり。されど、吾人の赤誠未だ本佛に通ぜざるかと、内は益々信念を清め、外には準備おさ／＼怠らざりき。本佛は吾人の微衷を喜してけん、七日はカラリと晴る。直ちに動員令を發して戰鬪を開發せり。されど息をつく暇もなき突撃には、同人こと／＼手負となる。但し幸ひにも、本佛の御加護に依り相當の好果を勝ち得たり。

八日は、朝より晴れて一點の雲もなし。風に散る櫻花は天華の如く、萬物笑みを含みて正にこれ絶好の降誕日和り。天幕内御寶前には高木主任考案の善美を盡せる花御堂安置され、午後三時にはさしもの廣場も、花徽章を附けたる少年少

氏。金堂圓、松信氏。金五圓、百井氏。金五十圓、藤原氏。以上巡回教化へ寄附ありたり。

### 總本山大法會

總本山妙満寺に於ては、例年の通り四月大法會を執行するを以て萩原本部長を始めとして、山内一統は前月より大車輪の準備をなせり、本多大僧正親下には、國友法務部長を從へ、名古屋より九日午後十時五十九分七條驛御着、金光有田師等出迎へ、直ちに自動車にて本山に着せられ、他の登山僧員は、十日午前八時までに全部到着、十日には十時より西村家祖先の第二回忌法要を厳修し、夜は方丈大廣間に於て法縁統合會大會あり、各自隔意なき意見を開陳し、志氣旺盛にて頗る盛況を呈せり。而して大法會は十一日より十三日迄三日間本多管長親下導師の下に全國數十名の布教師を率ひ、毎日午前九時及午後一時の二回音樂入のいとも嚴整丁寧なる大法要を厳修せられたり、今其説教并に講演部の概要を記さんに、

十一日朝七時説教 大橋日醫師 同午後三時 原田日男師 十二日朝七時 笹川日堂師 同午後三時 萩原信正 十三日朝七時 上田智量師 同午後三時 萩原本部長

女を以て埋めらる。既に天幕内は満員にて詮方なく、四方を開放せり。其數無量千餘名。但し少しの事故もなく盛會裡に散會す。

俄然、高木主任は驚る。極度の精神緊張と、肉體の活動は遂に高木主任を驚し、數日後には危篤とまで傳へらるゝに至れり。

あゝ勇ましき奮戦かな！。あゝ是こそ正しく『法華色讀』の聖訓に協ふべきものなり。吾等同人はこと／＼、總裁陛下御命令一下の元には、直ちに死をも辭せざる覺悟にて奮闘致せど、又以て上に國友部長の慈愛なく、高木主任の指揮宜しきを得ざれば、何くんぞ此の大責任を果す事出来やうぞ。

あゝ願はくは速かに健康を回復して、此大任に堪へしめ給へ。四月七日、豊、小供會四百名、夜大人會二百名。講師、高木日晴。關田日城。餘興、統一節。四月八日、豊、小供會千名、夜大人會四百餘名。講師、川島松雄、大造海海、野口日主。餘興、統一節、講談、花徽章、甘茶、御供物等を施與す。(かはしま)

#### 蓄音器の寄附

社會部同人、大造海海氏は蓄音器及びレコード五十枚うごくてらに寄附されたり。

○金十圓、早川大吉氏。金八圓、玉川由太郎氏、金五圓、松本八太郎

十一日午後七時より、本山講堂に於て、日蓮主義大講演會を開演す。

開會の辭 金光孝順師。熱烈感謝 松本布教師。宗教に關する吾人の私見 石川顯隆師。佛敎と現代文明 本多管長親下

十二日午後七時より同

聖訓朗讀 有田安道師。獅子奮迅の力 窪田純榮師。慈悲の敎 文學十國友法務部長。釋尊の大恩 本多管長親下

十三日午後七時より同

聖訓朗讀 有田安道師。法悦と精進 木村令快師。固有思想 大橋日醫師。世界的活動の根本 笹川日堂師。日蓮上人と我等 本多管長親下。閉會の辭 萩原本部長

各講師熱辯を揮はれ、聴者の肺腑に徹せり、かくて三日間講堂の聽衆等しく法雨に潤ひ、發歡喜心ならざるはなく思想の善導と、活氣を喚起する點に於て多大なる効果ありたり。

### 統一閣 月報

○日曜講演 四月四日、安心の第一義 妹尾義郎、聖德太子と日蓮聖人の交渉 松尾義郎、人生の悲觀と樂觀 森川日修。十一日、鎌倉靈地巡拜所感 妹尾義郎、三の徳 秋山乾英、即身成佛 新莊隆。十八日、日蓮主義内省 妹尾義郎、生命の二方面 高木日晴、法華經主義、關田日城。

○毎日午前子供會

○毎土曜の夜青年研究會 四月十七日の夜は、小林文學士を聘して「科學と宗教」に就いて講義を始め、爾今毎月第二土曜日に先生の講義あり、入會無料求道の士の毎土曜日御來會を待つ。

○當國所屬各區講演。十三日夜本郷正道會、十五日夜日本橋久保田氏宅、二十四日 小石川後藤氏宅、  
 ○三月二十九日 午後一時より地明婦人會會本多親下の講話因に故幹事矢野瀛子女史の補狀として宮岡山將閣下令夫人の御承諾を得たり婦人會の發展を祈る、

### 臨時宣傳講演會

關西より速く九州にかけ、約二旬に亘つて日夜編を連ねられて法輪を轉じ、目出度凱旋し給ひし法將本多日生親下と野澤少將閣下とを迎へて、三月二十八日曜午後一時より臨時講演會を開く、渴望せし法將の聲咳に接すべく定刻聽者は堂に滿てり。開會の辭に次いで野澤閣下登壇、社會問題に對する日蓮主義者の態度を題下に、現今の顛倒せる社會思想と其醜態とを開設し、之に白熱の日蓮主義の折伏を加へ、更に建國の大精神を説き、大和民族の使命を高張して愛國の熱血を湧かさしめ、一轉して急乘せる幾多日蓮宗僧俗に覺醒の痛痒を食はしめ、眞細なる同志が結束奮起せんことを切望せらる。續いで本多親下は健全思想とは何ぞやと題して二時間に亘り、所謂法華の妙劍五重相對の論法を以て混濁せる現代思想を逐一批判せられ、思想問題に與る後進に指南の大白牛車を

○三月十五日午後一時より岡山縣觀音寺堂に催されし民力滲透大講演會に臨んで、「思想大觀」本多日生、「國民精神の復活」野澤少將、聽衆六百長驅して關門に到り○三月十七日産島三義造船所工場に於て「眞正の生活」本多日生、「國民的理解」野澤少將、聽衆一千、○同夜佐賀動機に於て、「日蓮主義と實際問題」本多日生、「大日本國の使命」野澤少將、聽衆一千餘、十八日長崎劇場に於て、「法華冥合」本多日生、「文明の擁護」野澤少將、聽衆一千五百餘、○十九日長崎造船所に於て「眞の幸福」本多日生、聽衆一千五百餘、第二回講演を開き、「國民の覺悟」本多日生、「個人と團體」野澤少將、聽衆四千餘、○同夜長崎劇場に於て「正しき信仰」本多日生、「西洋文明の批判」野澤少將、聽衆一千五百餘、○二十日再び造船所に於て二回の講演會を開かれ、「人と教」本多日生、「國家の力」野澤少將、聽衆一千五百、正義と人生、○本多日生、「人心の社會に及ぼす影響」聽衆四千餘名、二十一日、有田黨業株式會社主催、有田小學校に於て「國民の三大自覺」本多日生、「正義と勝利」野澤少將、聽衆三百餘、○二十二日、つちや足袋工場に於て「修業の大綱」本多日生、「人生の幸福」野澤少將、聽衆一千二百餘、○同日午後久留米日吉小學校に於て「危險思想に對する警戒」本多日生、「教育と日蓮」野澤少將、聽衆三百餘、○同日夜、惠比壽座に於て「思想問題大觀」本多日生、「東洋文明の權威」野澤少將、聽衆一千餘、○二十三日、久留米銀行に於て師團將校四百餘名に對し「東西文明大觀」本多日生、○同日下の關本行寺に於て「現代の實際問題と日蓮主義」本多日生、「東西文明の融合」野澤少將、聽衆二百五十餘名、二十四日法駕を返して兵庫和田ヶ崎三義造船所に於て「健全なる思想」本多日

授けられたり。一人のよく動く者なく、大王の佳蹟に遇へるの感深かりしは宜なり矣、

### 花祭り

年々歳々人同じからざるも歳々年々いやは薫り咲く尊き花祭は四月八日午後二時より當國正境御寶前に於て嚴修せらる。大導師野口日主上人を圍みて御僧二十餘名、善男善女凡そ五百名ばかり、靜かに讀經唱題し奉れば、さながら我が此土は安穩にして諸天天鼓をうてるが如く、修了つて記念講演會を開く、釋尊と日蓮聖人と題して關田日域師、三徳有縁と題して井村日成師の有難き御講演あり法味益々深く胸に挿みし櫻花一輪にも歡喜の血潮の通ひて色鮮やかなり、紅白紫緑の草花にて飾られたる美しき花御堂の中に安置せられし御佛像に甘露の茶湯を注いで、御降誕を虔謝し奉る。

わしの山誰かは月を見ざるべき心にかゝる雲しなれば

西行法師

### 轉法輪

本多日生親下と野澤少將閣下が京都府月明石に於ける師子吼に續いて各地の轉法輪を略記する。

生「人の一生」野澤少將、聽衆四百餘、午後「國民精神の振起」本多日生、「情操の滲透」野澤少將、聽衆一千五百餘、法輪を轉ぜられしことに實に前後三十餘回、聽衆凡そ二萬四千人なりき、戰勝の回顧また尊くも有難し、又本多親親下の名古屋及大阪明石地方に於る統一團、思想運動を左に略記する。

□三月五日午後尾張一宮町歌舞伎座に於て 聽衆三千餘名（溢れて入場を謝絶せし者無慮千名）力 國友文學士、思想問題大觀 本多親下

□四月三日午後一時 批把島町批把島劇場内聽衆五百名。觀我佛心 山内櫻溪、精神の力 國友日域、國民教化の大本、本多日生、同日午後一時 春日寺村善律於正寺 聽衆四百人、信仰の徳、國友日域、法華經と日蓮上人 本多親下、同日午後七時半 豊橋武徳殿 聽衆一千四百人。國民精神に就て 大迫大將、五大要綱に就て 本多親下、同日十六日八時 大阪市東江小學校 聽衆三百、民力滲透の根本考察本多親下、同日午後四時 明石市公會堂 佛敎大觀、本多親下。

### 「統一會計より」

整理の必要あり前金切れの方は至急此際御送金被下度、會計より通知するも御送金無之節は雜誌の發送は見合すべく候

### 大日本救世團生る

熱烈なる日蓮主義者として知られたる野澤陸軍少將閣下及び本田眞太郎氏が國を憂ふるの赤誠は遂に陸軍大將大迫尙道閣下を動かして閣長となし、天下の名士を顧問となし、當代の智識を講師となし、五月二日の夜陸軍省行社に於て朝野の貴顯數十名を招じて目高慶其の發團式を執りたり。國歩艱難にして忠臣現はるゝの理、善くは三寶哀懇懇覺して大日本救世團の前途を御守護あらせ給へ。左に其の宣言を掲ぐ

### 宣言

國難來 國難來 國民一齊ニ發憤自覺スヘキノ秋ハ來レリ人心ノ激變是レ豈ニ自界叛運ノ端ニアラスヤ國權ノ外迫是レ豈ニ他國侵運種ノ兆ニアラスヤ 國難來 國難來 國民一齊ニ發憤自覺スヘキノ秋ハ來レリ其自覺ハ必ス正明的確ナルヲ要ス今ニシテ國難春風ヲ食ラントスルハ愚ナリ輕佻邪路ニ走ラントスルハ悔ナリ國民ハ誓テ愚ナルヘカラス誓テ悔ナルヘカラス其自覺ハ必スヤ中正ニシテ賢明ナラサルヘカラス 國難來 國難來 國民一齊ニ發憤自覺スヘキノ秋ハ來レリ國體ノ尊嚴天職ノ悠遠ハ一點侵蝕セラヘキノアラス然レトモ國民ニシテ國難來ノ自覺ヲ有セスニハ覺先一心ノ美風果シテ維持セラルヘキカ天業歎弘ノ天職果シテ發揚セラルヘキカ思フテ此ニ至ラハ誰カ悲憤セザランヤ。

國難來 國難來 國民衆シテ中正堅實ノ自覺ヲ有セルカ優勢利祿ニ眩シテ道念節義ヲ輕ンスルモノナキカ兄弟相闘キテ國體ノ外侮ヲ意

### 日蓮主義 戰士の伴侶 一部金壹圓八拾錢

民心變動の兆頗る急を告げ日蓮主義の戰士に對し進軍を促すこと切なりこの要求に應じ戰士の伴侶として教義の秘奥を開示せるもの實に本書なり書中論明する所は、思想問題と日蓮主義、宗教信仰の要義、法華經の五大教義、本尊の要義と其歸結、信行の要義、と其歸結、得益の要義と其歸結、佛教人身觀の概要、佛教倫理觀の概要の八大編にして記述極めて懇切なり知法思國の戰士速に一本を軍營に備へて藉略を諤ること莫れ。

### 法華經要文

本多大僧正撰  
一部定價 並製 金參拾錢  
上製 金五拾錢  
送料 金八錢

トセルモノナキカ奢侈虚榮ニ流レテ勤勞ノ美風ヲ損スル者ナキカ物質萬能ニ陷リテ精神生活ヲ理解セサル者ナキカ今ヤ世人ノ多クハ利祿ヲ得レハ奢侈ニ流レ良俗ヲ害シ利祿ヲ得サレハ惡徳ヲ抱イテ平和ヲ呪ヒ貧富交モ利ヲ射テ義アルヲヲテラントス是レ豈ニ寒心スヘキノ至リニアラスヤ 又思想界ノ潮流ヲ視レハ國體頹迷ノ弊ト雖徒奇矯ノ害トハ相背ツテ民心ヲ攪亂シ賢明ナル自覺ヲ有セサルモノ頗ル多キカ如シ 更ニ我國ノ世界的地位ヲ考察スレハ五大國ノ伍伴ニ列スト要トモ西國ノ事情ハ斷シテ安ヲ容テス然レニ民心ノ強健實ニ驚クヘキモノアリ 是レ豈ニ國難來ニアラスシテ何ノ 内ニ叛運種ノ端ヲ發シ外ニ侵運種ノ兆懸然タルニアラスヤ 國難來 國難來 不肖等一片ノ至誠忠愛スルニ忍ヒス茲ニ大日本救世團ヲ組織シ。

皇恩ノ無疆ヲ宣揚シ東洋文明ノ眞價ヲ光顯シ以テ中正ナル自覺ヲ喚起シ民心ノ歸趨ヲ導キ大國民タルノ禮度ヲ榮ヒ一切ノ事象ニ對シ善童ヲ以テ解釋スルノ身俗ヲ顯致シ禍ヲ轉シテ福トナシ愈益覺先一心ノ美風ヲ涵養シ天業歎弘ノ天職ヲ顯揚シ誓テ道教ノ國體ヲ一掃センリ欲ス。

大日本救世團本部

事業の梗概は教化部と社會部とに分ち、各地に講演會を開いて國體の眞意義を知らしめて、健全なる國民精神を喚起し、中正なる思想の傳播に努め、社會運動としては勞資の協調國民の救済等を起す計劃なりと。

### 本多日生師著書一覽

- 法華經の心髓 壹圓參拾錢
- 日蓮主義の運用 金壹圓八拾錢
- 聖訓要義 卷一、二、三、四、五既刊、卷六金壹圓七拾錢
- 開目鈔詳解 上卷一部 金貳圓
- 聖語錄 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の初歩 金七拾錢
- 東洋文明の權威 金壹圓八拾錢
- 日蓮主義の權威 金壹圓貳拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓貳拾錢
- 日蓮聖人の正傳 金壹圓八拾錢
- 日蓮聖人の感激 金壹圓八拾錢
- 日蓮主義の綱要 金壹圓貳拾錢
- 國民道徳と日蓮主義 金壹圓貳拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 國民教化 金壹圓八拾錢
- 法華經要義 金壹圓八拾錢
- 戰士の伴侶 金壹圓八拾錢
- 大藏經要義 各送料八錢

購讀希望の方は左記へ申込さるべし  
一部金參拾錢、二部金貳拾錢、三部金拾錢、四部金拾錢、五部金拾錢、六部金拾錢、七部金拾錢、八部金拾錢、九部金拾錢、十部金拾錢、十一部金拾錢、十二部金拾錢、十三部金拾錢、十四部金拾錢、十五部金拾錢、十六部金拾錢、十七部金拾錢、十八部金拾錢、十九部金拾錢、二十部金拾錢、送料一錢、八錢、半、前金送料不要

東京市外品川妙國寺内  
大藏經要義刊行會  
振替東京三一五九六番



次 目

文明の愛護と大成(時言).....	本 多 日 生
一、緒言.....	
二、宗教革命の失敗.....	
三、政治革命の失敗.....	
四、經濟革命の失敗.....	
五、労働者の地位.....	
六、西洋文明の流弊.....	
七、人類文明の生命.....	
八、先人の遺徳.....	
九、先帝の遺徳.....	
一〇、軍人の忠烈.....	
一一、高僧の遺業.....	
一二、現代人の輕佻.....	
一三、教化基本の動搖.....	
一四、教化基本の存在.....	
一五、國家理想の卓越.....	
一六、附和雷同を諷む.....	
一七、國民性を守持せよ.....	
佛敎信仰の正統.....	本 多 日 生
我等の準備.....	佐藤 鐵太郎
日本國の使命.....	野 澤 悌吾
無我の謬見.....	本 多 日 生
記事、報道十數件.....	

第廿四年六月號

8	7	6
1	5	9
2	3	4

發行所東京市本郷區三軒町西品川町百十二